

異種百人一首十種 (三)

— 道歌・教誡に関するもの —

伊藤嘉夫

異種百人一首百種翻刻を志してから三年目である。業余のことで、遅々としてはかどらないが、この稿で五十種になる。ここには道歌、教誡に関するものを輯めた。道歌は、釈教歌の系統に属する。勅撰集から抄いた「釈門宗派百人一首」(別名「二十一代集道歌百人一首」)や、「道歌新百人一首」等がある。又、「心学絵入道歌百人一首和解」と称する本があつて、百人の道歌を集めて、道話を以て解としている。これは歌の作者を明かにしていない。教誡の歌は室町期から、武士の教訓のために、漢籍の釈意を以て歌とし、教誡にするものが多くあらわれ来た。先に紹介した「武備百人一首」などもそうしたものの一つである。跡見学園架蔵の室町末ころの写本で、佚名氏の「百人一首抄」があるが、その巻末七丁半にわたつて、「為愚息兩人奉公学文頭書籍要詠五十首和歌」として、(実際は四十四首)、著者がその二人の子息の為に教誡の歌を録したものがあつた。いま、その全歌をかかげる。もとの体裁は、はじめに漢籍の語句を出し、歌頭に典拠を註している。今組版の都合で、歌の下に漢籍の語句を出し、そ

の下に典拠を示した。

- 1 時ならず君より召さばのり物もともをも待た
でまづ参るべし 君命召不俟駕行 論語
- 2 朝夕につかへぬるとてその君を狎れあなどり
て心乱すな 啓籠勿狎侮 尚書
- 3 君父に仕へん時は深き淵薄き氷を踏む心地せ
よ 君父仕則戰々競々臨深淵如履薄氷(欠)
- 4 顔の色見もせず隙も伺がはで物を申すはめし
ひなりけり 未見顔色言謂之瞽 論語
- 5 生れつき君たる人に学びずば何をもちてか国
を治めむ 君子不学何以治 毛詩
- 6 国を治め家を保つも佳人を集むるにこそ世も
静かなれ 治国安家得人亡国破家失人 三略
- 7 ねじけ人かたましきものつかへなば必ず君も
わざはひを得ん 君用佞人必受禍殃 漢書
- 8 玉とても琢ざりせば光あらじ人学びずば道も
知らじな 玉不琢不成宝人学不知道 孟子
- 9 人はただあしたに道を学びつつ暮に死ぬとも
名をばのこさむ 朝聞道夕死可 論語
- 10 万事よく知りたりとても老人に問ひたづぬる
を礼とこそいへ 知問人 礼記
- 11 老たるにやすく思はれ若きには懐かしせられ
友に信あれ 老者安朋友信小者懐 論語
- 12 咲きにほふ花ならねどもさかりなる人は必ず
衰ふる世に 盛者必衰人間観 左伝
- 13 芸能や成したる功を慢ずれば人罵りてなきに
杜なれ 悞其善喪厥善矜其能喪厥功 尚書
- 14 小しきを忍ばずあれば大なる計りごとまで乱
れ洩れぬる 小不忍則乱大謀 論語
- 15 上に居ても驕るけしきのなき人は高くあれど
も危くはなし 居上不驕高不危 毛詩
- 16 交りに人をうやまひ身をば猶へりくだること
よき品とする 敬人儉身則益威 礼記
- 17 遠き事よくよく思ひはからねば必ず近き憂へ
こそあれ 人無遠慮必有近憂 論語
- 18 時を得て富み栄ゆとも変る世に起るけしきを
深く慎め 天雖与徳世正不常深慎驕樂 漢書
- 19 世のならひおとろへぬともなづらへる心言葉
を人に洩らすな 貧无谄留無驕 論語
- 20 仮初に人をばねたみそねなむよ人亦我を嫉み
こそすれ 我嫉人人亦嫉吾 尚書
- 21 なすことの誤りあらば恥ぢらはずやがてあら
ため直すべきなり 過則勿憚改 論語
- 22 功をなす一人を深く賞すれば万の人のほげむ

なりけり 賞一勸百 六 韜

23 ところがのある一人を先に罪すればあまたの人の
こらしめとなる 罰一懲百 六 韜

24 義にあらず富み貴くもなる人はただ浮雲のた
ぐひ也けり 不義富且貴於我如浮雲 論 語

25 道もなく乱れたる世に驕りつつ富み貴きは深
き恥なり 邦無道富且貴恥 論 語

26 わが鞆や大鼓つづみ笛などは若きあひだのす
さみなりけり 壯年勤芸能 莊 子

27 年寄りの友ともなるは歌連歌さけ尺八に碁や
ものほん 老來慰遊友鞆 莊 子

28 かりそめもわが身をたかく貴みて人をいやし
め思ひわたすな 勿貴身賤人 尚 書

29 道を知り賢き人のあやまれる少しのとはは許
されにけり 赦小過舉賢才 論 語

30 身をも立て道を行ひ親の名を世に顕すぞ孝の
末也 立身行道揚名於後世顯父母孝終 孝經

31 ひとかたの言葉を聞きてことわりを極むる事
は共よりはなし 聞片言勿獄訴 尚 書

32 めづらしき鳥けだものを飼ふことは正によし
なきついえなりけり 国不畜珍禽奇獸 漢書

33 ちからだてあやしき事や吾が心みだれたるか
た人に語るな 不語怪力乱神 漢 書

34 一こともよきを教へて知らずは千々のかね
より猶まさりけり 一言益秀千金 礼 記

35 楽しみはこな汁を食ひ水を飲み腕を枕の中に
こそあれ 飯疏食飲水曲肱枕樂在其中 論語

36 美味き物飽くまでに食ひすみ所磨きたてむと
思ふべからず 君子食飽無求居安無求 論語

37 物ごとに満つれば欠くる驕れるはやがて亡ぶ

ぞ天の道なる 天道虧盈流驕 論 語

38 のむ酒ははかりなくとも晝ねしてすがた言の
葉心乱すな 酒無量不及乱 論 語

39 訪ね来る人にはやがて出迎へにこやかにして
酒を勧めよ 周公且一飯三吐髮洗三束 左伝

40 善き人を勧め悪きをよけぬるは古へよりのま
つり事なり 進善人退惡古良典 尚 書

41 人のなすわざをば毀り吾せしをほめ荷をいふ
ぞきかれざりけり 毀人侮儻自賢謂敗德 欠

42 富めり共心に欲のある人は太敷者と昔より言
ふ 雖留心欲是為貧人雖貧心樂為富人 莊子

43 芸能の一つなりとも達せしは賤しき身をも人
ぞうやまふ 芸者達者雖貧賤人尊恭 礼 記

44 信あれば禍ひは去り自づから命も永くさひは
ひを得る 信力堅固去災遇增福寿 毛 詩

以上である。直訳体のものであるが、いかに
も武家の父がその子に教えたものらしい。

大江千里集の序に、「搜古句構成新調」云々
とあって、いわゆる句題和歌を詠んでいる。比

較文学というか翻訳文学というか、そういった
試みを行っている。これが句題和歌のはじまり

である。巻頭の一首を出してみると、
咽霞山鶯啼尚少

山高み降りくる霧にむすればや鳴くうくひす
の声まれらなる

ほとんど直訳に近いものである
この様式が仏典に対して行われたものが釈教
歌である。

維摩經の十喩のなかにコノ身芭蕉ノ如シ
といふ心を 前大納言公任

風吹けば先づ破れぬる草の葉によそふるから
に袖ぞつゆけき

三界唯一心 伊勢大輔

ちる花も惜しまばとまれ世の中はこころのほ
かのものとははきく

のようなものから、法華經二十八品を各一首づ
つに詠むとか、一品径各一品づつをよむものな

ど、仏教に寄せたものをひろく釈教歌の部類に
入れて勅撰集に「釈教」の部立が出来るまでに

至った。句題和歌と釈教歌の様式をうけて出来
たのが、室町以後に好んで詠まれた「教誡歌」

であると云えよう。その下に啓蒙の心がうごい
ているようである。更に道歌への展開がある。

漢籍の語句と歌を出すものは「繪本百人一首と
いうのがある。「男女百人一首宝蔵」「狂歌百

人一首」などは、一人の作者によって作られた
もので百人一首でなく、百首歌で、時に小倉百

人一首のもじりになったりしたものが多い。
1 繪本道歌百人一集 撰者未詳江戸末刊

2 道歌百人一首麓枝折 同 一八三三刊

3 釈門宗派百人一首 尾陽隱納某 一八五六刊

4 道歌百人一首 水雲道人撰江戸末刊

5 和漢忠孝百人一首 笠亭仙果撰 一八五三刊

6 心学道歌百人一首 守本恵観輯 一八八六刊

7 家庭歌訓修身百首 杉谷正隆撰 三〇一〇刊

8 教育百首 齊藤由松撰 三七・一刊

9 和魂百人一首 高柳秀雅撰 三七・二刊

10 教訓百人一首 後藤和子撰 三九・三刊

以上十種を鰯刻することにした。江戸時代五種
明治三十年代五種である。

絵本道歌百人一集

撰者不詳
江戸後期刊

- 1 富めるをも何羨まむ貧しさの中に怡しむ人も
ある世に 貧而楽道 宗 固
- 2 聚めては国の光と成やせむ吾窓照す夜半の螢
は 明以照暗室理以照人心 後龜山院
- 3 心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や
守らむ 心誠則神明応之 菅原贈太政大臣
- 4 益良雄は名をし立つべし後の世に言ひつぐ人
も語りつぐがね 立身行道揚名於後世以顯父
母孝之終也 山上 憶良
- 5 錦にも綾にもあらで堪忍のふくろは見ても見
事なりけり 忍之一字衆妙之門、忍事敵災星
小島 橘洲
- 6 三度たく米さへこはしやはらかし思ふままに
はならぬ世の中 一粥一飯当思来処不易
大久保湖鯉鮒
- 7 皆人のもとの心はます鏡磨かばなどかくもの
はつべき 室直清(鳩巢)
- 8 思ひとれば此の身の外に道もなし身を守るこ
そ道と知るなれ 自天子以至於庶人壹是以修
身為本 伊藤 仁齋
- 9 孝行の心を天も水にせず酒と汲まする養老の
滝 大垣 市人
- 10 思へ只満つれば懸て欠くる月の十六の闇や人
の世中 天道虧盈而益謙 沢庵 禪師
- 11 子は知らぬ親のこころの染めゆかた盆前胸の
踊るおもひを 厥父母勤勞稼穡厥子不知稼穡
蜀山人 赤良

異種百人一首十種(三)

- 12 鏡にも鞍にもならず焼棄てよ益なき人の曲り
根性 不随教弟子連可還父母 山崎 宗鑑
- 13 笛吹かず鼓敲かず獅子舞の後脚になる身こそ
安けれ 陳平知有余以見疑 売 茶 翁
- 14 角あれば物の懸りて難かしや心よ心まろまろ
とせよ 事能常忍得身安 最明寺時頼
- 15 楽をして稚な畜ちをする人は老いて貧苦の種
と知るべし 少不勤勞老必艱辛、小能服勞老
必安逸 大燈 国師
- 16 人の親のこころは闇にあらねども子を思ふ道
に迷ひぬるかな 人莫知其子之惡、莫知其苗
之碩 平 兼 盛
- 17 蝸牛角振り付けて来るならばかたかたつむり
猶丸くなれ 忍過事堪喜 北川 真顔
- 18 朝顔をなにはかなしと思ひけむ人をも花はさ
こそ見るらめ 雖觀秋月波中影、未遁春花夢
裏名 藤原道信朝臣
- 19 濁江の蓮の浮葉に居る蛙躍れば落ちて沈みこ
そすれ 富貴生驕者生貧賤 有 辰
- 20 吉日は味方よければ人もよしただ肝要は方角
をとれ 後魏武帝曰、紂以甲子亡、武王以甲
子勝 源 義 経
- 21 世を捨て山に入る人山にても猶憂き時は何処
行くらむ 君子去仁惡乎成名 凡河内躬恒
- 22 道ならぬ富なもとめそ世のなかに浮きたる雲
のをしへ聞くにも 不義而富且貴於我如浮雲
宮部 義正
- 23 折り得てもこころ許すな山ざくらさそふあら
しの吹きもこそすれ 貞婦白頭失守半生之清
苦俱浮 仏国 禪師

- 24 あす有と思ふ心に謀られて今日も空しく過し
つる哉 忽謂今日不学有来日 前參議俊憲
- 25 家富みて飽かぬことなく事ふとも報いむもの
か親のめぐみは 重資財薄父母不成人子
小沢 芦庵
- 26 身代にかへて怡しむ人もありいのちに代へて
金持つもあり 莫貪意外之財、頽惰自甘家道
難成 油畑斎貞柳
- 27 八百の嘘を上手に並べても誠ひとつに叶はざ
りけり 巧偽不如拙誠 拙堂 和尚
- 28 人は城 人は石垣 人は堀 なさけは味方あ
だは敵なり 武田 信玄
- 29 自から角一つあれ人心あまり円きは転び易き
に 聰婦言乖骨肉豈丈夫 隆覚 禪師
- 30 鳴子をば己が羽風に動かして心と騒ぐむら雀
かな 利欲熾烈即是火況 鎌倉右大臣
- 31 老の身が転ぶを笑ふその人よ命長かれ思ひ知
らせん 以直報怨以德報德 藤原俊成卿
- 32 様々に名の変りたる恋をして浮世の果は皆小
町なり 三姑六婆実淫盜之媒 芭蕉 桃青
- 33 急げ人いづれの道を学ぶにも老は心の尽て甲
斐なし 光陰可惜譬諸逝水 徹 書 記
- 34 落ちてゆく奈落の底をのぞき見よなにほど欲
の深き穴ぞと 世上無知人欲險、幾人到此誤
平生 円 智 坊
- 35 奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと
人ほ知らせむ 先王有至德要送、以訓天下
後 鳥 羽 院
- 36 うつし見ぬ人やなになり世の中に人のかがみ
は今もこそあれ 以銅為鑑可正衣冠、以人物

鑑可明德失

後水尾院

なる刀おそろし 言下暗生消骨火、笑中偷鋭

37 仏道へ唯投入ておけ宝弥陀の浄土を金庫にし

刺人刀

権僧正公朝

59 かたちこれ深山がくれの朽木なれ心は花に為

て 悲心施一人、功德如大海 円光大師

49 怠らず行かば千里の末も見む牛のあゆみのよし遅くとも 陽気発処金石亦透、精神一到何事不成

60 千万の仇に對ひて怒猪の省みせぬを心ともかな 三尺韻光影出匣氣圧千軍 橘 千 蔭

38 山賤のあくまで薪こりつみて帰る重荷に苦しむを見よ 欲多傷身財多累身 吉川惟足

50 たのしみは春のさくらに秋の月夫婦仲よく三度食ふ飯 家門和順雖饗殮不堪亦有余歡

61 世の中の親に孝ある人はただ何につけても頼もしきかな 風興夜寢所思忠孝者人不知天心知之 荒木田守武

39 あしの木の蔭をばよきて盗人の立田の川は水も結ばじ 君子防未然 不処嫌疑間

51 斯くばかり過ぎて帰らぬ年月をあだに我が身のなど暮らしけむ 人生只百年此日最易過

62 一筋に人をも身をも折るかな打つ墨繩の直なれとのみ 木從繩則正、君從諫則聖 前中納言定房

40 武士の取りつたへたる梓弓引きては人のかへるものは 臨戦先登暴骨血流不辭者此武士勇也

52 いかばかり黄金はおもき宝にて力わざにももたれざるらむ 富貴如將知力求仲尼年少合封

63 二つなきことわり知らは武士の仕ふる道もうらみなからむ 為人臣者無外交不取武君 太田 道灌

41 極楽は遙けき程と思ひしに勤めて至る所なりけり 勤為無価宝

53 何事も見ざる聞かざる云はざるがよござるとさる人のいはれき 非礼勿視、非礼勿聽、非礼勿言、非礼勿動 良 因

64 さしいづる鋒先をれよものごとにおのが心を鉄槌にして 滿招損謙受益 鈴木 正三

42 小敵よ弱き敵よと油断すあなだるゆゑに落ちをこそとれ 千丈之堤以蟻蟻之穴而潰

54 天が下有りとあるもの無くもがな扱や欲しきの尽くると思へば 放得功富貴、心下便可祝

65 たらちねの心の闇を知るものは子を思ふ時の涙なりけり 父正則子亦正矣、故為人父者必正身以律其子 前大納言基良卿

43 憂きことの大江の岸をすぎてこそ世に住みよしの里もありけれ 歳寒然後知松柏之後凋也

55 世の中は斯くこそ有りけれ猿の手のひだりのぶれば右はみじかし 痴聾瘍瘡家豪富智慧聡 烏丸光広卿

66 わが肱を枕にしつつ思ふかなげにたのしみはこれにすぎじと 飯疏食飲水曲肱而枕之樂亦在其中 後嵯峨院

44 よきことの種となるべき心もてなといたづらに任せおくらむ 人才雖高不務學問不能致聖

56 神儒仏三つの教への外ならず善に善報惡に惡報 作善天降之百祥 雲居 和尚

67 塗りかくす漆の下の黒仏なかなかはげよとの白木に 朝有紅顏誇世路、暮為白骨朽郊原 親鸞上人

45 歎きには歎きはなきを歎びを求むればこそ歎きとはなれ 歎樂極兮哀情多 他阿上人

57 他になど昔を遠く思らむ只今日の日の過る也けり 人世一世間如白駒過隙 木下長嘯子

68 膏梁の酒を慎しみ酒ひかへ色遠ざけば病ひあるまじ 婢美妾嬌非閨房之福 法印 道三

46 庭の木はただ直なるを見てもよしすぢりもちれるところむづかし 妙満寺日如上人

58 惜しからぬ身ぞ惜しまるる足乳根の親の遺しし形見見と思へば 身也者父母之遺也、事君不忠非孝也 元政上人

69 甲斐なしや今日は昨日のあやまちをおもひ知りても改めぬ身は 遷善当如風之速、改過当如雷之烈 前内大臣実隆

47 在りはてぬ命待つまの程ばかり憂きことししげく思はずもがな 生年不満足百常懷千歳憂

70 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もたと

48 手にとれば人をさすてふいが栗の多みのうち

平 貞 文

前内大臣実隆

のむ人の子のため 哀々父母生我劬勞 欲報
之徳昊天罔極 在原業平朝臣

71 交りを黄金に結ぶ世の人の逐の心ぞつねなかりける 世人結交用黄金 上田 秋成

72 心から横しまに降る雨はあらし風こそ夜半の窓はうつらめ 人心生一念、天地悉皆知 日蓮 上人

73 津の国の難波の事も偽りはのちの世かけてあしとこそ聞け 人眼者懸天、隱而勿犯用 権僧正聖尊

74 世中は虎狼も何ならず人の口こそ猶まさりけれ 口是傷人斧言是割舌刀 後京極掇政

75 帰らじとかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとどむる 竭力尽勞而不望其報程功積事而不求其賞 楠 正行

76 一杯の酒に心を遣りて又為すべきことはよくつとめてよ 勿飲過量之酒 伴 蒿 蹊

77 よしなした争ふ事を楯にして怒をのみを結ぶ心は 蝸牛角上争何事 石火光中寄此身 西行 法師

78 極樂は直き人こそ参るなれ曲れる心長くとどめよ 八正雖道広十悪人不往 性空 上人

79 末の世に祈求むる其事の験なきこそ験なりけれ 鬼神無常享 享干克誠 伝教 大師

80 物ごとに足らぬ足らぬと思ふこそ迷ふ心のつくり病ひよ 良田万頃日食二升 大家千間夜八尺 宗祇 法師

81 器用さと稽古と好きの三の内好きこそ物の上手なりけり 有去者其事竟成 晋子 其角

出でこもせめ 大江 元就
83 先立たぬ悔の八千度悲しきは流るる水の帰り来ぬなり 見事不学用時悔 閑 院

84 我ながら我もなつかしなき人のわけて残せるかたみと思へば 身体髪膚受之父母、不敢毀傷孝始也 傷孝始也

85 我が身猶我が心にも叶はねば人を心にまかずべしやは 無住 法師

86 行末の榮え願はば人の為よからむ事の数を積てよ 有陰徳者必饗其業以及子孫 橘枝直

87 などてかくいそがしいとて二階からおちてのちはひまになりけん 遇病而後思強身為宝 落柿舎去来

88 人はただ差出ぬこそよかりけれいくさにだにも先をかくれば 君子啖於言而敏於行 左近将監実澄

89 諫めても犬より劣る人ならば見ざる聞かざる言はざるがよい 国之興也天遣賢人与格諫之士 邦房 親王

90 夜鶴の心もあれど鳥てふ鳥しも親を思ふ哀れさ 慈鳥尚及哺羔羊猶踞足 武者小路実蔭

91 道ならぬ事な叶へそさりとともと思ひたがへて 我いのるとも 享非分之福必蒙無辜之災 渡 辺 綱

92 蓮葉の濁に染まぬ心もて何かは露を玉と欺く 大丈夫心事当如青天白日 僧正 遍昭

93 誰も背我身を掴みて思ふべし命は惜しき物と知らずや 勿貪口腹而恣殺生靈 慈鎮 和尚

94 手枕の隙間の風も寒かりき身はならはしの物にぞありける 素富貴行乎富貴 素富賤行乎賤

95 事足らぬ身をな怨みそ鴨の脚短かくてこそ浮む瀬もあれ 世上功名看木雁 夢窓 国師

96 憂きことは世に経る程のならひぞと思ひも知らで何なげくらん 知命者不怨天、知己者不怨人 元三 大師

97 腹の立つ事こそ無けれ世を経るに幼心に這ひて遊べば 聡明叡知守之以愚 問屋酒船

98 偽を作りて言はば春の田にあらぬ舌をや果はすかれん 愚者作罪者小墮地獄 契沖 法師

99 最上川人をくだせばいな船のかへりてしづむものところそきけ 寂然 法師

100 白妙の蓮の上の露のまもいさぎよからむ心ともがな 振衣千仞岡濯足万黒流 右近局

〔解説〕絵本道歌百人集、中本、袋綴刊。編者不明、江戸末期刊か、序跋なし。毎頁作者と歌漢文の詞句、歌意の絵を出している。

歌と、漢文の句とを寄せてあることは、室町期作者不詳の百人一首抄の後にのせた、その子息の教誡為に書いた経書の語句によつて詠んだ五十首詠に体裁が似ている。然し、その成立については全くちがう。五十首詠の方は一人の作者によることと、この百人集の方は百人の詠歌によるものであことは勿論ながら、前者は、句題和歌や、釈教歌のように、歌題として、経書の句があつて詠まれ、もしくはその意を歌を以て解いてあるのに対し、これは、歌意に即した経書の句を添えている。但し歌首にはこれを欠くものがある。歌も句も、比較的民間に流布したものを採らうとしている。

道歌百人一首麓技折

撰者不詳
天保四年冬刊

- 1 櫓も擡もわれとはとらで法の道ただ船ぬしに
まかせてぞ行く 聖徳 太子
- 2 斑鳩や富の小川のたえばこそわが大君の御名
は忘れし 片岡 飢人
- 3 たらちねの織りて着せたるから衣いま脱ぎ捨
つる吉野川かみ 役行者
- 4 山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かと思ひ
母かと思ふ 行基 菩薩
- 5 もろこしの山のあなたにたつ雲はここに焚く
火の煙なりけり 檀林 皇后
- 6 中々に山の奥こそ住みよけれ草木は人の善悪
をいはねば 中将 姫
- 7 すゑの世にいのり求むる其のこのしるしな
きこそしるしなりけれ 伝教 大師
- 8 あししともよしともいかに言ひはてむ折々か
はる人の心を 弘法 大師
- 9 世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋も
果しなれば 蟬 丸
- 10 雲しきて降る春雨はわかねども秋の垣根はお
のいろいろいろ 慈覚 大師
- 11 法の舟さして行く身ぞもろもろの神も仏も我
をみそなへ(入唐し給ふ時) 智証 大師
- 12 憂きことは世にふるほどのならひぞと思ひも
知らで何なげくらん 慈慧 僧正
- 13 極楽は直き人こそまるるなれ曲れる心ふかく
とどめよ 空也 上人
- 14 よろこぶもなげくもあだに過ぐる世をなとか

- 15 はいとふこころなるらん 永観 律師
- 16 夜もすがら仏の道をもとむればわが心にぞた
づね入りぬる 恵心 僧都
- 17 出る息の入る息待たぬ世の中をのどかに君は
思ひけるかな 安養 尼
- 18 夢のうちにはゆめもうつつも夢なればさめては
夢うもつとぞ知れ 覚鏝 上人
- 19 いかにせん身をうき草の荷を重みつひのすみ
かやいづくなるらむ 増賀 上人
- 20 とく生れさらずばさてもやすらはで二仏の中
にあふぞかなしき 性空 上人
- 21 法の華八巻ばかりにかぎらめや松竹さくら当
意即妙 和泉 式部
- 22 世を捨つるすつる我身はすつるかはすてぬ人
こそ捨つる也けり 西行 法師
- 23 いづくにも我が法ならぬのりやあると空吹く
風にとへど答へず 慈鎮 和上
- 24 さだかにもうき世の夢をさたらずば闇のうつ
つに猶や迷はむ 隆寛 律師
- 25 月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心に
ぞすむ(他力本願の心を) 法然 上人
- 26 さまざまに浮世の品はかはれども死ぬる一つ
はかはらざりけり 明慧 上人
- 27 立寄りて影も映さじ流れては浮世にいづる谷
川の水(笠置の奥深く住ひて) 解脱 上人
- 28 春風にほころびにけり桃の花枝葉にのこるう
たがひもなし 道元 禅師
- 29 奥山の杉のむら立ともすればおのが身よりぞ
火をいだしける 栄西 禅師
- 30 悟る道まよふちまたと別れてもおのが心の外

- 31 にやはある 聖光 上人
- 32 山賤の白木の合子そのままにうるしつけねば
はげ色もなし 善慧 上人
- 33 いにしへの鎧にかはる紙子には風の射る矢も
通らざりけり 熊谷蓮生坊
- 34 立ちかへり再びものと思ふなよいつのわかれ
かうからざるべき 称念 上人
- 35 身をおもふ人こそげにはなかりけれうかるべ
き世の後をしらねば 円空 上人
- 36 曇りなきこころの月はむかしより待ちをしむ
べき山の端もなし 無住 国師
- 37 おのづから心もすまず身もすまず萱が下葉の
つゆの月影 法燈 国師
- 38 苦をも見ず楽をも知らぬその時は善悪ともに
およばざりけり 大覚 禅師
- 39 あしなくて雲のはしるもあやしきに何をふま
へて霞たつらむ 法心 上人
- 40 雲はれてのちの光と思ふなよもとより空に有
明の月(本来成仏の心を) 仏国 国師
- 41 人間にすみし程こそ浄土なれさとりてみれば
方角もなし 親鸞 聖人
- 42 ころから流るる水をせきとめておのれと淵
に身を沈めけり 一遍 上人
- 43 長閑なる水には色もなきものを風のすがたや
浪と見ゆらむ 陀阿 上人
- 44 ころからよこしまに降る雨はあらじ風こそ
夜半の窓はうつらしめ 日蓮 上人
- 45 千代野をがいたたく桶の底ぬけて水たまらね
ば月もやどらざ 如大 禅尼
- 46 幾たびか思ひ定めて替るらむたのむまじきは

- 心なりけり 北条相模守平時頼
- 45 座禅せば四条五条の橋の上ゆきさきの人を深山
木にして 大燈 国師
- 46 いづくより生まれ来るともなきものを帰るべ
き身と何歎くらむ 夢窓 国師
- 47 村雨の音羽の山のとぎす啼く一声はたが
はざりけり 等持院左大臣尊氏
- 48 いづれをか我とはいはむかりにただ土水火風
あはせたる身を 仏徳 禅師
- 49 何事も身のむくいぞと思はずは人をも世をも
うらみはてまし 愚中 禅師
- 50 すめらぎの山賤になる教へこそ仏につかふ法
の道なれ 無文 禅師
- 51 仁と義と勇にやさしき大将は火にさへ焼けず
水に溺れず 楠河内判官橋正成
- 52 すみ捨つる宿をいづくと人問はばあらしや庭
の松に答へむ 万里小路中納言藤房
- 53 慾ふかき人の心と降る雪はつもるにつけて道
をわするる 寂室 和尚
- 54 枯れ果てて然も花さく梅が枝にこゑをもたて
ず鶯の鳴く 月庵 禅師
- 55 慈悲の目に憎しとおもふ人はなし科ある身こ
そ猶衰れなり 真阿 上人
- 56 思ひたつ衣の色はうすく共かへらじものよす
みぞめの袖 向阿 上人
- 57 神も見よ仏も照らせ我が心後の世ならでねが
ふ日もなし 隆堯 法師
- 58 火宅にはまたもや出でむ小車にのり得て見れ
ばわがあらばこそ 音誉 上人
- 59 諸行みな無常なりとて世を捨つる人のこころ
- 60 白露のおのが姿をそのままにもみちに置けば
紅の玉(真如有縁の心を) 正徹 書記
- 61 はねばはね躍らば誦れ春駒ののりの心はしる
人ぞ知る 宥快 僧都
- 62 偽りもまこと共になかりけり迷ひしほどの
心にぞわく 公朝 僧正
- 63 一たびも仏をたのむ心こそまことの法にかな
ふ道なれ 蓮如 聖人
- 64 釈迦といふいたづら者が世にいでて多くの人
を迷はするかな 一休 和尚
- 65 いづくにも心とまらば住みかえよながらへば
また元の古郷 竜宗 和尚
- 66 遠からぬものとさとの都鳥こと問ふひとの
なきぞ悲しき 蛭川新左衛門親当
- 67 遁世のとはんは時代に書きかへむ昔はのがる今
は貪る 建仁雄長老
- 68 いづくとも心とどめぬうき雲はいかなる山の
うへもいとはず 南禅春林西堂
- 69 いへばうしいはねば胸にさわがれて思はぬさ
きや仏なるらむ 後小松院侍女一休母
- 70 麻糸の長し短かしむづかしやうむの二つにい
つかはなれむ 蛭川親当妻
- 71 かかる時さぞな命のをしからむかねてなき身
と思ひ知らずば 太田左金吾持資入道道灌
- 72 人は城人は石がけ人は堀なさは味方あだは
敵なり 武田法性院大僧正信玄
- 73 よしや世にいはねの小松年経とも待ち見むほ
どはこがらしの風 奥山 上人
- 74 寒熱の地獄にかよふ茶柄杓も心なければくる
- 75 思へ唯みつればやがて欠くる月のいさよひの
間や人の世の中 沢庵 禅師
- 76 なにごともけふの歡樂すぎぬればかならず明
日の苦患とぞなる 雲居 国師
- 77 耳に見て目にきくならばうたがはじいのちな
りけり軒の玉水 無難 禅師
- 78 釈迦阿弥陀嘘つけばこそ仏なりまことをいは
ば凡夫なるべし 鈴木 正三
- 79 得道はありけるものを隣なる親仁が提げし燧
ぶくろに 一条 国師
- 80 さればとて覚めずもあれなまよひ来てとても
夢みる此の世なりせば 鳥丸権中納言光広
- 81 さしむかふ心ぞ清き水がみ色づきもせず垢
づきもせず 盤珪 国師
- 82 稻妻のかけにさきだつ身を知れば今見る我に
逢ふこともなし 梅天 禅師
- 83 思へ人唯ぬしもなき大空の中にはもる海山
もなし 元政 上人
- 84 身にうとき杖さへ身をば助けけり心よもの
心わするな 妙立 和尚
- 85 縦横の五尺に足らぬ草の庵結ぶもつらし雨な
かりせば(那須山上に庵して) 仏頂 和尚
- 86 思ふこと二つ除けたる其跡は花の都もいなか
なりけり 芭蕉翁桃青
- 87 鳥といへば鳥にもあらぬ蝙蝠のあたひむなし
き墨ごろもかな 以八 上人
- 88 井の端に遊ぶ子よりもあぶなきは後生願はぬ
人の身の上 袋中 和尚
- 89 なかなかに身を思はねば身ぞやすき身を思ふ

にぞ身は苦しけれ 無能 和尚

90 朝夕のくちより出づる仏をば知らですぎにし

あとぞ悲しき 諦忍 律師

91 釈迦阿弥陀地藏薬師と名はあれど同じところ

の仏なりけり 鑊眼 禪師

92 何事も言ふべきことはなかりけり問はで答ふ

る松風のおと 沢水 禪師

93 為べきこと片付ける気は善所なりせずにおく

気はいつも苦しむ 拙堂 和尚

94 仏とは誰むすびしかしらいとの賤のをだ巻く

りかへしきよ 天桂 和尚

95 一時もあだにはなさじさりとは逢ひがたき

身のくれやすき日を 古月 禪師

96 きかせばや信太の森の古寺の小夜更けがたの

雪のひびきを 白隠 和尚

97 笛吹かず太鼓たたかず獅子舞のあと肢になる

むねの安さよ 売茶翁月海

98 野辺みねば知らぬけぶりの今日もたつあすの

薪や誰が身なるらむ 涌蓮 法師

99 すつる名もまたよばれんと思ふぞよ三世の仏

の其の後の世に 法源 禪師

100 あれを見よ鳥辺の山の夕けぶりそれさへ風に

おくれさきだつ 元和 上皇

○

〔解説〕青表紙中本袋綴、題簽「道歌百人一首

麓技折」18cm×12cm表紙裏に書肆の説明文あり。

「田中」の丸印ある序文あり。本文二頁に

三人、又は一頁二人づつの歌を収め、肖像を概

ね一頁二人掲げる。作者に略伝を書く。刊年な

く、発売の書肆、京都勝村治右衛門外一、大坂

秋田屋太右衛門外一、江戸岡田屋嘉七外二を出

す。表紙裏にこの書の説明が刷られている。序を

含んで本文二十六丁。序は署名なく。一丁表。

かの京極黄門卿の小倉百首に習ひて諸宗の名

徳の詠みすてを集めしも、更に秀逸を撰みた

るにはあらず。唯一時の眼を喜ばしめて讚仏

乗の因みになさむとなり。

とあり。本文は、一丁裏聖徳太子、二丁表に片

岡飢人、役行者、二丁裏から三丁表の見ひらき

に、行基、檀林皇后、中将姫と三人、以下表、

裏各二人合せて百人の絵像と歌をかかげ、

行基菩薩 和州宮原寺開基本朝橋ヲ作ルノ始也
法相宗聖武帝ノ帰依僧

熊谷蓮生坊 俗稱ハ次郎直実一朝事ニ仍テ蓮生シ、法然
上人ノ室ニ入テ弟子ノ列ニ加ル

のように作者に略伝を註した。又時に詞書を掲

げたものもある。2片岡飢人「豊聡太子の哀れ

親なしと詠み給ひし返し」、3役行者「吉野の

川に垢離とり給ひて」、50無文禪師「兄皇子の

世に出づべきことなど奨め給ひしに」、55真阿

上人「將軍の御館にして多くの科人をみてよみ

給ひける」、56向阿上人「三井寺を出でて浄土

門に入るとき」、71太田道灌「中村重頼討ちとり

し敵の首を見せて歌よめと申しけるに」、96白

隠和尚「泉の蔭涼寺にして一夜大歡喜を得て」

など。

同じ板木で屢重版が行われたとみえ「京都寺

町通六角下小川源兵衛板」(刊年未詳)「京

寺町三条下ルめとぎや宗八」(天保四年巳冬刊)

などあり。この「麓技折」はひろく行われたと

みえて、異版もある。序跋なく本文十七丁。一

丁表だけ聖徳太子一人、一丁裏から十七丁裏ま

で各三人の像と歌とを掲げた。像は、前書の二

人づつの像を組みあわせて三人づつに製版した

ものと覚しい。略伝の註を省略し、詞書も概ね

省いた。絵像の組みあわせ方によって順序に多

少異同がある。この本、「柳緑華紅編、京、平

安書林梓」というが、刊記等を欠く。

なお、「道歌百人一首」と題する二種二本が

ある。ともに刊記なく、乙本は甲本の改刻のよ

うである。甲乙異った序があり、甲本柱に「道

歌」とあり乙本にはない。本文共に十三丁。各

面を四分し歌留多様にし、絵像と歌を掲げる。

歌は全く「麓の枝折」と同じ、順序に小異ある

程度、勿論略伝詞書はない。甲本の序は

千早振神代には八雲たつ氷川上より流て歌て

ふものの皇国に尊めるを待るに、及びなき雲

の上より月洩る賤のひなびたるも歌の様はか

はりたるもあれど心に違ひたるはなし。され

ば貴きも賤しきもこの道にかしこき人々の悟

道歌とてこれかれ百首を撰り広重うしが肖像

の上におきて其の道徳をのぶるに南。

と、拵亭紀賤丸識すところである。乙本は、

「広重うしが肖像」をただ「肖像」としただけ

で、像の板も肖せて粗い。後刻と思われる。

この麓技折は以上に述べたように少くとも数

種の刊本があり、写本でも伝えられるものがあ

って、「道歌新百人一首」の海内流行部数百万

などというはつたりはないが、かなり広く読ま

れたものと思われる。道歌が庶民に迎えられた

ことの一端をあらわすものと云えよう。

道歌新百人一首

水雲道人戯著
刊年不詳

1 独り来てひとり帰るも迷ひなり来らず去らぬ
道を教へむ 一休 禪師

2 吹かずとも花にはかぎりあるものを心みじか
き春の山風 蒲生 氏郷

3 ながらへてたとへば末に帰るとも憂きはこ
世の都なりけり 承久 新院

4 山中の湯に入相の声きけば諸病無病となるが
嬉しき 鯛屋 貞柳

5 里はあれて宿は朽ちにし跡なれや浅茅が露に
松虫の鳴く 鎌倉右大臣

6 秋の野におく白露の朝な朝なはかなき身とは
たれもしらずや 鉄 山

7 かぞふればとまらぬものをとしといひて今年
はいたく老ぞしにける 大中臣淵魚

8 おしるや難波の水に焼く塩のからくも我は
老いにけるかな 藤原 春津

9 老いらくの来むと知りせば門さしてなしと答
へて逢はざらましを 白 頭 翁

10 さかさまに年も行かなんとりもあへず過ぐる
齢やともにかへると 閻 筒 翁

11 咲くを待ち散るを惜しめば花ゆゑに春の日か
ずは長し短かし 島原 吉野

12 分け登る山路に心迷ふかな麓のさくら峯の月
かげ 松下 禪尼

13 山寺の軒端の桜問ふ甲斐に御法の声を聞くが
嬉しき 源左衛門且

14 思ひやれしと思ふ旅だにも我がふるさと

は恋しきものを

平判官康頼

15 老が身のわかきに会はぬ隔てには兎に角歳が
邪魔となりけり 至清堂捨魚

16 いたづらな子故に闇の親ごころ行灯を置く所
だになし 一関 芭丸

17 足弱く耳遠き身は憂きことの聞えぬ山もさら
にたづねん 高畑 金也

18 知らざりき鏡の影を頼む身のえびすの国にう
つるべしとは(王昭君) 仙台 唐麿

19 難波津をならふ昔にかへれかし恋しくぞ思ふ
たの父母 なごや蔵主

20 老の坂登りかかりてたらちねの諫めの杖ぞ今
は恋ひしき 武長竹行也

21 くり言をいはじとすれどくる珠数のたまさか
は出む老のひがごと 浜口 太平

22 さしなれし舟にもやがてはなれ鶉のさばきに
秋の風さむくして 三好 親春

23 執着の心や娑婆に残るらむ吉野のさくら更科
の月 菅 江

24 用心の用にたためぞめでたけれかねて覚悟の
ゆだんなければ 自隋落先生

25 足ることを知れば自貧も苦にならず有無の二
つをそれにまかせて 十返舎一九

26 朝顔を釣瓶に植ゑて千代が句の貰ひ水する夜
のから井戸 四方 赤良

27 もののふの草むす屍年ふりて秋風さむし桔梗
が原 加藤 美樹

28 山桜咲けば白雲ちれば雪花見てくらす春ぞす
くなき 河越松山人木阿弥

29 急がれぬ年のくれこそ哀れなれ昔はよそに聞

きし春かは

三条 入道

30 さくら花あかぬあまりに思ふかな散らずは人
の惜しまざらまし 堀河右大臣

31 浮世をば出づる日毎にいとへどもいつかは月
の入る方を見む 八条院高倉

32 しきみつむ山路の露に濡れにけり曉おきのす
みぞめの袖 小 侍 従

33 山里の稲葉の風に寝覚めして夜深く鹿の声を
聞くかな 中宮大夫師忠

34 聞くやいかにはうはの空なる風だにも松におと
するならひありとは 後鳥羽院宮内卿

35 高しとて尋ねざりせば此の一木我もえとりは
峯のみぢ葉 岸本氏(現存)

36 一夜あけば今年といはむ嬉しきに身につもる
歳も思はざりけり 静舎宇万伎

37 寂しさは心からなるながめかとはばやよそ
の秋の夕ぐれ 桂満片岡氏

38 月花を見にとて出づる猿心まづ友どちの庵を
問ひけり 式亭 三馬

39 ぬるまのみ人にかはらぬ思ひ出を浮世にかへ
す暁のかね 読人しらず

40 春毎に花はかはらで春ごとにうつろひてゆく
人のおもかけ 権堂 花園

41 思ひやる鶯の高根もわが庵もてらすは同じ世
々の月かげ 道 融

42 世にあはぬ悟はいらじ誰もかも錦の袈裟は尊
とかりける(沙門のおこりを悪む) 徳 一

43 中々に悟るは遠し迷はじと辿るもかたし法の
道芝 妙智尼(二代目瀬川)

44 嬉しきは憂きの種ぞとなげかじな逢ふは別れ

- のはじめなりける 島原 初瀬
- 45 なき身とはたれも知りつつもろともいまは
におよぶことをしぞ思ふ 中村 頼重
- 46 何事も皆いつはりの世の中に死ぬるばかりぞ
誠なりける 小野 小町
- 47 つゆとのみ消えにし跡を来て見れば尾花がも
とに秋風ぞ吹く 大磯 虎
- 48 何故に捨てにし身ぞと折々はころにはちよ
すみぞめの袖 読人しらず
- 49 迷はずは悟らざらましようきことの菩提の種と
なるもたのもし 薄雲 (四代目)
- 50 萌えいづるも枯るるも同じ春の草何れか秋に
あはで果つべき 祗 王 女
- 51 世の中の秋田刈るまでなりぬればつゆも我が
身もおきどころなし 兼好 法師
- 52 何となく心のすみて山寺の入相の鐘の聲ぞ身
にしむ 権律師慶秀
- 53 宵すぎる学びの窓のともし火に光をそへてゆ
く螢かな 越前 梅友
- 54 佐渡島やをしほの波を漕ぎわけてはじめてみ
ゆるまつ崎の宮 日蓮 上人
- 55 わが心なくさめかねつ更科や娘捨山にてる月
を見て 板鼻 検校
- 56 言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも中々よしや
雪の富士の根 埴 保己一
- 57 ながらへて果は何せんとても世は秋来る鳥の
名にこそ有りけれ 釈 了 阿
- 58 たらちねに面似る老のますかがみ形とともに
落つる泪か 修 静 庵
- 59 散る花にさとれば開く法の花をしまざりけり
- 入相の鐘 安良女 (後に尼となる)
- 60 契りあればなにはの里にやどりきて浪の入日
を拝みつるかな 藤原 家隆
- 61 二つなく頼む誓ひはこの品蓮の上の疑ひも
なし 無言 上人
- 62 斯くばかり契りまします阿弥陀仏知らで悲し
き年を経にけり 一演 (大中臣氏)
- 63 取りとむるものにあらねば年月を哀れあな憂
と過しつるかな 藤 義 懐
- 64 とどめあへずむべもとしとは言はれけり然も
つれなく過ぐる齢を 大瀬 三郎
- 65 鏡山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身は
老いやしぬると 大伴 黒主
- 66 春秋を千々にかぞへていつとてか名残をしま
ぬ時は来たらむ 源 頭 基
- 67 世を捨てば四条河原ぞ住みよけれ行き来の人
をちがや草木 読人 不知
- 68 法相の室戸の心ひとつにてうゐの浪風立たぬ
日はなし 増賀 上人
- 69 とりはづす器のけがも即菩提われから出づる
南無阿弥陀仏 竹 綾 人
- 70 わがやどの庭の桜の散りきとも知らでや人の
明日も訪ふらむ 川越六経園
- 71 行くすゑは皆あふ空ぞ旅衣北と南へ立ちわか
れても 小 串 氏
- 72 見しやいかにうき世の外の夢さめて法の跡と
ふ松風もなし 小初瀬宗的
- 73 鷲の巢の鳥のたとへなまなかに悟ると思ふ迷
ひなりけり 浪華 団水
- 74 火宅ぞと悟らば後世の火の車消すにもかは
- 法の雨露 茅寺 哲宗
- 75 争はぬ姿はつねにあらはれて風もやさしくあ
たる青柳 河越連慶堂円司
- 76 暁の夢野の鹿がおそはれて寢覚めに聞きて哀
そひぬる 浪華 春旭
- 77 もろともに去年見し花は其のままに開けど見
るはかはる世の中 悠閑 法師
- 78 惜してども散りてかへらぬ桜花植ゑにし人も
思ひ出られて 高谷氏 女
- 79 咲く花を見るにつけても白雪のふるごとのみ
ぞおもひ出られて 好古 道人
- 80 時めきし人も盛りの花もまた残んの雪と消ゆ
るはかなさ 大 悟 庵
- 81 妻をもち子を持ちてみて親ばかり世に重きも
のはなしとこそしれ 真 春
- 82 わかかりしもの心を捨てかねてまたとりあ
ぐる老のしら髪 (作者欠く)
- 83 おのづから造る地獄でかねてより心の鬼を責
めよ人々 功 徳 院
- 84 朝夕に歎く心を忘れなんおくれ先だつ常のな
らひぞ 空也 上人
- 85 竹馬の友をかぞへて老の坂つれてのぼるは古
来まれなり 秋 長 堂
- 86 退るるに難くもあらむ世の中をいとひながら
に迷ふはかなさ 西念 法師
- 87 台所唐人たちも朝夕に我が日の本をおろそか
にすな 手斧権すす兼
- 88 よい年をしても子供と同じやうに祭の太鼓・
正月がよし 慈 悲 成
- 89 仲秋の月にめでても今川のをしへは守れ酒宴

遊興

山東 京伝

90 老いにけり眼も明らかに齒も達者気にかかる

ことなしといふまで

滝亭 鯉文

91 淋しさは糸とるわざに輪をかけて心ぼそさよ

秋の夕ぐれ

浦屋 常成

92 孝行の子がかうかうと精出せば親もころころ

心よぎぬた

真 永

93 年老はぬ葉と菊の花の名をさとらせんとや翁

草とは

水 盛

94 朝嵐庭の落葉も吹き散りてあはれとおもふ秋

も暮れゆく

松山 賢立

95 山里は世のうきよりもすみわびぬことの外な

る峯のあらしに

丹 後

96 松の下岩根のこけも墨染のそでのあられやつ

ゆの白玉

高かん上人

97 夢とのみ思ひなれにし世の中を今更何におど

ろかすらむ

成 忠 女

98 うしといふ何処にすてむ世の中は心ひとつの

ものによりける

古河 蓮阿

○ 「解説」「道歌新百人一首」(題簽)一冊、袋綴

中本刊。書肆楽善堂梓とあり刊年未詳、江戸末期刊か。表紙裏に「水雲道人戯著、道歌新百人一首、書肆楽善堂梓。海内流行部数百万」とあり。「部数百万」がおもしろい。序あり、

世に道歌てふものは専ら釈教を旨としたるをいふめれど、我が大やまと歌は、もとより人の心を種として詠みいづるものなれば、僧法師のみならず、名将賢士も心に感じふれて、詞に顕はるる所の自らにその趣相似たるも多

かりぬべし。されば君に仕へまつり、親を思ふ誠の心より出づる言の葉は人の人なるこれやまことの道歌とこそいふべけれど思ふ心を此冊子のはし書きに弥生の春の花の窓に、秋みふる栗の園人録す。

本文、一休禪師から古河蓮阿まで九十八人、百人に二人欠ける。作者不詳のもの二首、作者の名を欠くもの一首、静舎、加藤宇万伎の歌は二ヶ所に出ている。各頁上下二つにわけ、風景文は人物を配して各一人一首を出す。そのうち、二丁裏から見開きに文章あり

大原三吟の連歌に宗祇をはじめとして、宗長桜井の基佐など会合なし時、二十一の問答ありしとぞ、その中に

おもはぬかたに拾ふはまぐり
といへる句に

汐のぼる水うみぎはに風たちて 宗祇

げに思はぬかたに拾ふ蛤といふに湖水際にてと付けられしは面白けれど、湖にはまぐりのあるべき道理のなければ、宗長も基佐も難じていふ、蛤を水うみ際とあそばし候こと、その例いかんとありければ、宗祇こたへて、佐渡の国に越の湖といふがあり、其の所は海に近き地にて、風立つ時は湖の方へ、海の蛤を吹きよすることもあらんかといふ心にて、貫之よみ給ひし歌あり

潮のぼる越の湖ちかければ蛤もまたゆられ
来ぬらむ

と古歌を申されしには、兩人も感伏せしとなん実には諸道共に此記憶こそあらまはしけれ。

と、唐突にある。単連歌一つと、歌一首、これを加えれば百首になるというのではあるまいけれど55の歌、説話をともなう歌であるが、藩侯の供し参勤交代で帰郷の道すがら、姥捨山に月見の宴に、皆歌を詠み合った。検校はこの歌を書かせてさし出したところ、これは古今集の歌とすぐ解るものであるが、検校は結句を「見で」と濁って読むのだと云ったもので、盲目月を見かねた哀れがあった。

この撰者、水雲道人の伝は詳しくないが、自ら戯者とうたう処も、海内流行部数、百万と云う処も人を食っている。百人一首と云うからにわざわざ数えてみる人のために九十八首にしておき、別文の中に二首かくしておいたりしている。しかも、静舎宇万伎、加藤美樹と、字面を変えて二ヶ所に出しているのは、同一人であることを知らなかったとすれば、愛敬にもなるが、知りながらぬけぬけと出しておいたとすればこれまた人を食っている。

鳥原の吉野、初瀬や、瀬川、薄雪などの遊女を出し、至清堂拾魚、赤良管江、十返舎一九、式亭三馬、山東京伝など狂歌師や戯作者を出し、その歌も、道歌とか釈教歌というよりむしろ狂歌に属するものを取り入れている。釈教歌から道歌にうつり、道歌が更に狂歌の中になだれ込んでいく過程がわかるようである。

いわば、和歌形式が民衆の中に入りこんで行くことで、ことわざや、金言のような内容を持った道歌と、笑いの中に人生を画く狂歌という新分野をひらいたとも云えよう。

和漢忠孝百人一首

笠亭仙果撰輯
嘉永六癸丑正月板

- 1 神を祭り仇をはらひて大倭国の真中に宮はじめす
神武 天皇
- 2 にぎはや日早く心をひるがへし君につかへし
事の賢こそ
櫛玉鏡速日命
- 3 八咫鳥君し追はずは皇神の道のしるべもかひ
やなからむ
道 臣 命
- 4 子の子たる道をつくすは易からじ父々たらぬ
親につかへて
虞 舜
- 5 此の君も独り醒めたり酒の池にともに酔ひた
る名をば流さで
象 竜 逢
- 6 聖人とも知らば稟なき身を割きて七つの窟を
もとむべしやは
王子 比干
- 7 さみだれぬ日も袖沾れつ桶をもとめし人の昔
しのべば
三宅連始祖田道間守
- 8 たちばなの実さへ花さへ海にすててかぐはし
き名ぞ世にのこしける
弟 橘 媛
- 9 此のをちを知らぬ人こそ言ひけらしのち長
きは恥多しとは
紀武内宿祢大臣
- 10 かしこしや鄙をまねびし人しもぞ鄙を都にう
つしたりける
呉 太 伯
- 11 大殿に雨降らぬ日もたみ草を掩ふ御袖はいつ
も沾れけむ
仁徳 天皇
- 12 君よ君おのがものから受けじとやあらまきな
らぬあまつひつぎも
皇太子菟道稚郎子
- 13 子の道にみをつくしては難波なる葦のほわた
もうらみざりけん
関 子 騫
- 14 くりかへし倭文のをだまき賤の男の昔も今に

- なすよしぞなき
子 路
- 15 石河の水はもとより濁らしをいかでなき名を
すがさりりけむ
蘇我倉山田石川麻呂
- 16 もろこしの下邳の圯橋あとしてて君や御杵を
ささげましけむ
大 織 冠
- 17 ねになきて七日七夜も垣本に立ちし人こそい
さを立てけれ
申 包 胥
- 18 水底にしづむ心の清けさは江の蓮にもまさり
たりけり
三閭大夫屈原
- 19 葛の葉にあらぬわが身を秋風に吹きなびかす
なうらがへれとて
楚 屈 盧
- 20 身のうさはいとはざりけりまめやかに八幡の
神のみこと伝へて
贈正一位和氣大納言
- 21 あはれあはれ名もいたつきの駅路になやめる
父を慕ふ未通女よ
橘 逸勢女
- 22 いかばかり波の立ちるにたらちねの恋しかり
けむ奥つ島守
参議 篁卿
- 23 むさばらぬ君はかへりて許多のいさをし人の
上にたちけり
賛侯 蕭何
- 24 むかし今二人の君につかへても一つ心に名を
ばけがさじ
留侯 張良
- 25 我を知る人の為にはをしまざる命めでたく仕
へしや君
鄭公 魏徵
- 26 あしくとも上枝下枝もしげりあひていつのま
さかき栄えましかば
唐 太 宗
- 27 命をぞうべ惜しみけるますらをも千代もと祈
る母につかへて
下 莊 子
- 28 壁ぬりの後は漆を身に塗りてすがた変へしは
誰ならなくに
晋 予 讓
- 29 皆人のはなのたもともぬれにけむこけの衣の

- つゆのあはれに
良岑宗貞朝臣
- 30 めでられし鶴はよしなし千代の後あはれ人こ
そ名を残しけれ
衛 弘 演
- 31 玉櫛笥ふたりの君に仕へずと言挙げせしは誰
ならなくに
王 蠋
- 32 草の葉の露はきえてもまた結ぶ過ぎてかへら
ぬ人ぞかなしき
齊 田 横
- 33 まごころに出でし空言情ありげにいつはり
人の為にて
戸隠山寺児
- 34 雪折れのはてをうしとや心から枯れし小松ぞ
あはれなりける
小松内大臣
- 35 故郷にひとりもたてる姥桜うしろめたしや風
吹かずとも
池田宿侍従
- 36 あるじなきやどの軒端にほととぎすひとりも
なくか声もをしまで
長谷部信連
- 37 島守のからき歎きを雲の上に吹き伝へけむ八
重のしほ風
平 康頼
- 38 さかゆべき若枝の為に心から老木のさくら散
りいそぐらむ
三浦大介義明
- 39 君を思ふ心にくまのあらざれば猛きけものも
おそれざりけむ
馮 媛
- 40 行状をなほすしるしはまめ人の折りしおぼし
ま直さざりけり
朱 雲
- 41 身をすてて君をすくひしたばかりは千度いく
さをせしにまされり
紀 信
- 42 ますらが殿の板戸をたたかずは君の眠りの
いつかさむべき
舞陽侯樊噲
- 43 冠の玉によそへてそしれども中むなしきはわ
たくしもなし
左丞相陳平
- 44 清き名を千代もと思ふ子のためにさらぬ別れ

- をいそぎたりけむ 王 陵 母
- 45 父ひとり救ふと思ひしをとめごの力にゆるむ 罪科の沙汰 淳千意 女
- 46 黒髪のしろくなるまで越の雪にうもれいたくも年ぞ経にける 蘇 武
- 47 賭弓に勝ちたるよりも親の杖にうちこらされてほまれとりけり 隨身 公相
- 48 網の魚のがれぬ命のがれけりすなどりせしも親の為とて 僧 某
- 49 もろともに乗らぬ車の尼眉や眉をひそめて君いさめけむ 班 女
- 50 いにしへをしをしのべばあはれ粟津野のむつきの風ぞ身をとほしける 今井四郎兼平
- 51 東なる父をしたふと旅衣袖うちふりし心かなしも 舞女 微妙
- 52 狩りくらし宿る板屋の隙もりて闇にきらめく稲妻のかげ 曾我十郎祐成
- 53 親の為身を捨てずは富士の野にあら人神とたれかあふがむ 曾我五郎時致
- 54 唯民を救へといひし忠言ぞつく杖竹のよのかがみなる 鄧 禺
- 55 身退く大樹のかげはいとどしくめぐみの露ぞ袖におきける 馮 異
- 56 老いぬれど弥すこやかに年波のよるをもふせて立たせざりけり 伏波將軍馬援
- 57 わたくしに手折るもいかが山吹もこがねの色にさくとおもへば 楊 震
- 58 四つもの知るとおそれし人の子は三つのかたきをよくふせぎけり 楊 秉
- 59 仇の首載せて帰れる小車のわれは顔さへあはれなりけり 中原 章信
- 60 夏の夜の灯に入る虫を便りにてあやふきわざも亡き父の為 阿 若
- 61 鞍が岳銀覆輪の雪よりもいさぎよき名はいまも消えせず 菊池肥後守武光
- 62 大碓かろく引揚げて隠岐の島舟出せし人のゆくへしらずも 篠塚伊賀守
- 63 おほきみをみ舟のうへにむかへつやつこは水とつかへしや誰 名和伯耆守長年
- 64 湊川ここをとまりと身をすてて流れての世ぞ人なかせけり 贈正三位橘正成朝臣
- 65 今もまた涙になして袖ぬれつこのしし君がことの葉の露 橘正行朝臣
- 66 草の廬三たび訪はずは三つ脚の鼎と立ちて世にも栄えじ 忠武侯孔明
- 67 伊勢海老のひげいさましく振る時はよろづの魚も腰屈むらむ 壯繆侯関羽
- 68 君なくば母もその子もながらへて長坂橋の霜ときゆらむ 順平侯趙雲
- 69 たまはれる錦の御旗押し立てて心はつひに敵になびかず 備前三郎高德
- 70 み吉野に残る白雪消えながら花と見られしことの嬉しさ 村上彦四郎義光
- 71 つらなれる枝もさそひて三越路の葉原の雪に折れし松かな 義 鑑 房
- 72 益良雄も及ばざりけり淀川や君がみ舟となりし手弱女 侍女 小万
- 73 千むらにも語りつぎけむ一匹の絹をも受けぬきよき心を 范 宣
- 74 かまやまに下焦れたるもみち葉を我もたをらむ母の手向けに 陳 遺
- 75 夏山に花の一葩も残らねど芳しき名ぞ今にとめける 結城中務大輔氏朝
- 76 九つのかねの灯せにおひてますらをの名ぞかがやかしける 本間近江守
- 77 いせの海かひある世にもあひかねてひろはぬ玉と身をや捨てけむ 伊勢守貞孝朝臣
- 78 いたづらになる身も嬉し残しおく千鳥のあとを君しふめれば 平手中務大輔政秀
- 79 あしくとも秀つ枝下つ枝も茂りあひていつのまさかき栄えましかば 唐 太宗
- 80 我を知る人の為にはをしまざる命めでたくつかへしや君 鄭公 魏微
- 81 富みて且つ位高くてすこやかに命のながき人は誰ぞも 郭 子 儀
- 82 雲のごとくさも起し残しおく筆にも見する竜のいきほひ 顔 真 卿
- 83 山中の牡鹿の角の束のまもたゆまざりけむたけき心は 山中鹿之助幸盛
- 84 鉏鎌をつるぎに代へて今もその君をたすくと人は知らずや 高坂弾正忠
- 85 散りし花袖につつみてかくせどもあたる風を恨みざらめや 王 世 名
- 86 あて人も憚らず打つ杖竹のすぐなる道にたれかよらざる 海 瑞
- 87 岳山に飛びし雲雀も末つひにうたて檜の木のもとに落ちけり 岳 飛
- 88 大君の稜威たのまば群がれるひつじも猛き虎をおそれじ 文 天 祥
- 89 君と親につかふる道の中にたちあはれゆくて

の露ときえぬる 獄官 石奢

90 これも亦庭の槐樹の朝つゆとくだけで清き名をとどめけり 力士 鉏麿

91 万代にいかで伝へむ出雲なる亀井の水の潔き名を 亀井新次郎

92 わしの山峯の月かけ深草や末野のうづらかりに見えけむ 深草元政法師

93 三千代経てなるてふ桃にいやまして木のみぞ親の活葉なる 徐 如 行

94 にしきともはやせや松の下もみちあたの血しほにそめし袂を 松下助三郎豊長

95 子の道をつくしける哉天さかる鄙の果まで父をたづねて 曹 起 鳳

96 子の道をふみぞたがへぬ父母に受けたる身にはさずつくれども 僧 丈 草

97 まめ人の人やりならぬ濡れ衣君はほさねど人そかわかす 馬指堂曲翠

98 大江戸の雪にぞはえし山科の里にかくせる君がひかりは 藤原朝臣良雄

99 歌をよむわざに秀でてかつかつもながめを今に残す小野寺 斧寺 秀和

100 日本の神の御霊もそひけらしやまと腹なる漢のますらを 国 性 爺

○

〔解説〕武者の顔の大絵ある表紙、「和漢忠孝百人一首」と題簽ある袋綴中本。木版本一冊。巻頭五丁欠。貞秀画、笠亭仙果撰、嘉永六年正月刊。板元東都竹屋次郎吉。奥に

此書也賈人急発免不経校訂而命彫刻々成之後見之筆工杜撰錯用字法格者不違枚挙雖然細小

文字難改刻徒嘆一口氣而已 仙果再記

嘉永六癸春丑春正月發行。東都書林、出雲寺万次郎より板元竹屋次郎吉まで一四をあげる。

撰者が發行書肆にむかつて、文句を云っているのが注意される。著者の校訂を経ずして筆耕にまわし文章が錯乱誤脱があつて困るがしかたがないと云っている。この頃の書肆は全くひどいものがあつたとみえて、嘉永四年七月、東都米林堂刊の、「武芸百人一首」(松亭金水撰)があり、武芸の人百人を挙げ各に撰者の詠を出している。「和漢忠孝百人一首」も、この様式によつたものである。然し、ここに一つの不思議なことがあるのは、版木が本屋の間で取引されたと見えて、転々するうち、この本にあるべき序が、前述の松亭金水撰の「武芸百人一首」の中にまぎれ込んで、

物の本書き笠亭仙果、世上の幼童達に告げ奉る。孝は百行の本、忠臣は孝子の門より出づ、親に孝ならざるもの、いかでか忠なるべき、仁義五常の徳も錯りて行へば婦人の仁あり。俠客の義あり、幫間の礼あり、盜賦の智あり、痴人の信あり、忠と孝とは本心より出でず、仮に真似ても、せざるに勝れり。是れ五常の上に立つべき故にて、人として片時も忘るべからざるは此の二道にて、行ふにもいと難く古來忠孝を全うせし者多からず、よりて本書房の需に応じ、異國の人をさへまじへて忠孝の人一百人を輯め、画伝に物して訓誡の階梯とす。倉皇の間の愚撰なれば、全行の

人の漏れ、欠行の人も入りたれど、私に虚誕を加へず、悉く引証あり。讚歌は甚拙陋なるものから、万一见あやまりて其の人の詠とな思ひを僕が漫吟なり。画像本抛なし。みな画工の意匠に任す。伝に於いても方寸の紙欄、その概略を記すのみ、委曲は他自別巻にもし侍らん。

とある。これは「武芸百人一首」に附けられるべきものでないことは、別に著者松亭金水が署名して武芸百人一首の撰者であることを告げている。全く混人である。撰者仙果が不満を書かざるを得なかつた事情も、書肆がその不満を刷り込まざるを得なかつた事情もわかるようである。書肆が、商品としてのみ書籍をあつかひ、その著者も本そのものと大切にしなかつたことがわかるようである。猶この本、鄭公魏徵、唐太宗が二ヶ所(25と80、26と79)に出ている。然も像だけは別々の版になつている。

この本、頁ごとに画像と歌を出し、上欄に小伝逸話などをかかげる。この様式は小倉百人一首でも行われたが、異本では緑亭川柳が創めたものであつた。

「和漢忠孝百人一首」とはいうものの、実際には、いわゆる「ものの本書き笠亭仙果」が「僕が漫吟」であると云つていられるように、仙果が、和漢の忠孝の人百人を撰んで、これに一首づつの歌を添えたもので、むしろ「詠史百首」とすべきもので、異種百人一首の中には、このようなのが少くない。「花くらべ」のように、一人が代作したと思われるものもある。

釈門宗派百人一首

尾陽隱納某跋
安政三丙辰仲春跋

- 1 まちかねて歎くとつげよみな人にいつをいつ
とていそがざるらむ(風雅) 善光寺如来
- 2 弥陀たのむ人は雨夜の月なれや雲はれねども
西へこそゆけ(玉葉) 真如堂如来(夢託)
- 3 いかにせむ日は暮方になりぬれど西へゆくべ
き人のなき世を(玉葉) 清水寺觀世音(夢託)
- 4 極楽に生れんと思ふ心にて南無阿弥陀仏とい
ふぞ三しん(玉葉) 石清水八幡宮(夢託)
- 5 つくづくと思ひしとけばただ一つ菩提の道ぞ
この山の道(玉葉) 春日大明神(托宣)
- 6 色ふかく思ひけるこそうれしけれ本の誓をさ
らにわすれじ(玉葉) 熊野大権現(夢托)
- 7 千早ぶる玉のすだれを巻きあげて念仏の声を
きくぞうれしき(玉葉) 日吉聖真子
- 8 夜もすがら仏の御名を唱ふればこと人よりも
なつかしきかな(玉葉) 新熊野権現
- 9 しるべある時にだにゆけ極楽の道にまどへる
世の中の人(菩提寺講堂の柱に虫のくひたる
歌新古今)
- 10 いそげ人みだのみふねのかよふ世にのりお
れなばいつかわたらん(玉葉) 聖徳 太子
- 11 柴の戸にあけくれかかるしら雲をいつむらさ
きのいろに見なさむ(玉葉) 円光 大師
- 12 ひとたびもなむあみだぶといふ人の蓮の上に
のぼらぬはなし(拾遺) 空也 上人
- 13 極楽をねがふ思ひの煙りこそ迎への雲をやが
てなるらめ(統古今) 僧都 源信

- 14 いにしへにいかなる契ありてかは弥陀につか
ふる身となりけむ(統古今) 律師 永観
- 15 極楽へまたわが心ゆきつかばひつじのあゆみ
しばしとどまれ(新古今) 大僧正慈円
- 16 心なきうゑ木ものりをとくなれば花もさとり
をさぞ開くらむ(統古今) 大僧正隆弁
- 17 紫の雲の迎へをまつの戸に心をとほかくる
藤波(新統古) 前大僧正慈澄
- 18 夜もすがら西に心のひく声にかよふあらしの
音ぞ身にしむ(玉葉) 前大僧正忠源
- 19 秋ふかく時雨るる西の山かぜに皆誘はれてゆ
く木の葉かな(新後撰) 権小僧都房巖
- 20 ちかひおおくおなじ蓮のうてなこそこのころうき
身の頼みなりけれ(新千載) 法印 定為
- 21 露の身のおき所とてたのむかなさとりひらけ
し花のうてなを(新千載) 法眼 行濟
- 22 夕暮の高根をいづる月影も入るべきかたを忘
れやはする(新後撰) 法眼 能信
- 23 うき世にはなほとどめじと思へども此の人が
ずにいかでいらまし(統拾遺) 法眼 俊快
- 24 やよやまてかたぶく月にことづてむ我も西へ
といそぐ心あり(玉葉) 法橋 顕昭
- 25 六の道いくめぐりしてあひぬらむ十こゑ一声
すてぬちかひに(統後撰) 湛空 上人
- 26 更にまた尋ね来つれどすみなれし昔の花の都
なりけり(新拾遺) 雙救 上人
- 27 南無阿弥陀仏の御手にかくる糸のをはり乱れ
ぬころともがな(新古今) 法円 上人
- 28 入月のなごりをそへてしたふかな峯より西の
雲のをちかた(新後拾遺) 示証 上人

- 29 濁る世の人の心をそのままにすてぬちかひを
たのむばかりぞ(新後拾遺) 賢珠 上人
- 30 くもりゆく人の心の末の世を昔のままにてら
す月かげ(玉葉) 円空 上人
- 31 夕日かげさすかと見えて雲間よりまがはぬ花
の色ぞちかづく(統拾遺) 禅空 上人
- 32 のりつめる人をし渡す舟なれば西の流れに棹
やささまし() 覚鏝 上人
- 33 さのみよもいる月かげもしたはれし西に心を
かけぬ身ならば(統千載) 彰空 上人
- 34 見せばやと花のなかばを残してもたれふる里
のわれをまつらむ(統千載) 漸空 上人
- 35 弥陀たのむ心のうちにへだてなき仏はさらに
身をもはなれず(統千載) 耀空 上人
- 36 西へ行く道のしるべはなかなかにたのおろか
なる心なりけり(新千載) 如空 上人
- 37 ここにやりかしこに呼ばふ道はあれど我が心
より迷ふとをしれ(新後撰) 順空 上人
- 38 立ちならぶ影やなからん万代の後まで照らす
法のともし火(新千載) 覚空 上人
- 39 よしあしの人をわかしと蓮の花このしなま
で咲きはるなり(新拾遺) 兼空 上人
- 40 おろかなる身はしもながら紫の雲の迎へを待
たぬ日もなし(新千載) 浄阿 上人
- 41 音にきく君かもしつかいきの松まつらむもの
を心づくしに(新古今) 寂然 法師
- 42 これやこのうき世の外の春ならむ花のとぼそ
の明けぼのの空(新古今) 寂蓮 法師
- 43 極楽の弥陀の誓ひにすくはれてもるべき人も
あらじとぞ思ふ(統千載) 千観 法師

- 44 西へ行く月をやよそに思ふらむころにいらぬ人のためには(統千載) 西行 法師
- 45 三芳野のみつわけ山の滝つせもすゑはひとつの流れなりけり(新後撰) 寿証 法師
- 46 極楽ははるけきほどと聞きしかどつとめていたる所なりけり(拾遺) 仙慶 法師
- 47 にこりある水にも月はやどるぞとおもへばやがてすむ心かな(新後拾遺) 願蓮 法師
- 48 よしさらばわれとはささじ蜚小舟みちひく潮の波にまかせて(統拾遺) 信生 法師
- 49 思ひたつ心ばかりをしるべにてわれとはゆかぬ道とこそ聞け(新後撰) 蓮生 法師
- 50 山の端の入日をかへす袂にも西に心をかくとぞみし(新統古今) 頓阿 法師
- 51 底清きこころの水のすみぬれば流るるすゑも西へこそゆけ(統千載) 覚鏝上人母
- 52 さはりなく入る日を見ても思ふかるこれこそ西の門出なりけれ(新勅撰) 郁芳門院安芸
- 53 秋風の峯のしら雲ならばは有明のそらに月を見ましや(統後撰) 皇太后宮大夫俊成女
- 54 をしへ置きて入りにし月のなかりせばいかで心を西にかけまし(金葉) 皇后宮肥後
- 55 心をばかねて西にぞおくりぬるわが身をさそへ山のはの月(風雅) 従三位親子
- 56 紫の雲たなびきてはたちあまり五つのすがたまちみてしがな(玉葉) 従三位為子
- 57 たゆみなく心をかくる弥陀仏人やりならぬ誓ひたがふな(金葉) 田口 重如
- 58 月かげはいるやまのはもつらかりきたえぬ光をみるよしもがな(新勅撰) 源 季 広
- 59 草の原光まちとる露にこそ月もわきてはかけやどしけれ(新後撰) 大江 頼重
- 60 鳥の音も浪のおとにぞ通ふなる同じみ法をきけばなりけり(千載) 平 康頼
- 61 いさぎよき浦に影こそうかびぬれしづみやせんとおもふわが身を(千載) 神祇伯願仲
- 62 身をさらぬ日吉のかげを光にて此の世よりこそやみははれぬれ(新後撰) 祝部 成賢
- 63 すみのぼる月の光をしるべにて西へもいそぐわが心かな(新後撰) 基俊 朝臣
- 64 うき身をも捨てぬ誓ひをまちわびぬ迎への雲よそらだのめすな(統古今) 源具親朝臣
- 65 世にこゆる誓の海のみをつくしたつるしはいつも朽ちせじ(新千載) 源邦長朝臣
- 66 名のりする雲居のこゑは郭公月見よとのしるべなりけり(新千載) 源兼氏朝臣
- 67 せにこゆる誓の舟をたのむかなくなるしき海に身はしづめども(玉葉) 丹後経長朝臣
- 68 草の庵につゆきえぬとや人はみるはちすの花に宿りぬる身を(玉葉) 資隆 朝臣
- 69 紫の雲井をねがふ身にしあればかねてむかへを契りこそおけ(統千載) 菅原在良朝臣
- 70 阿弥陀仏となふる声を揖にしてくるしき海をこぎはなるらむ(金葉) 源俊頼朝臣
- 71 三十あまり二つの相妙なればいづれも同じはなのおもかけ(新後撰) 中原師光朝臣
- 72 月も日もかげをばにしにとどめおきてたえぬ光ぞ身をてらしける(統後撰) 従三位行能
- 73 今ぞこれいる日を見ても思ひこし弥陀のみ国の夕暮の空(新古今) 皇太后大夫俊成
- 74 たちかへり又ぞ沈まん世にこゆるもとの誓のなからましかば(新後撰) 大藏卿隆軒
- 75 誰も皆わたる心をはしとして上なき道にすすむなりけり(玉葉) 前参議教長
- 76 へだつなよつひには西とたのむ身を心をやどす山の端の月(新統古今) 前中納言為相
- 77 山のはの入日をいかでかへしけむわれだに西にいそぐ心を(新統古今) 権中納言具行
- 78 窓の月軒ばの花のをりをりは身にかけて身を頼まむ(統拾遺) 権中納言経平
- 79 一たびもその名をききて頼むこそ上なき道のしるべなりけり(新千載) 前大納言為氏
- 80 船よばふ声にむかふる渡守うき世のきしにたれかとまらむ(新後拾遺) 前大納言為家
- 81 西の海みちひく潮にまかせつわれとはささぬ法の早船(新統古今) 後九条前内大臣
- 82 入月を見るとや人の思ふらむ心をかけて西にむかへば(千載) 堀川入道前右大臣
- 83 こと浦に朽て捨たる蜚小舟わが方にひく波もありけり(風雅) 後光明院前関白左大臣
- 84 故郷にのこる蓮はあるじにてやどる一夜に花ぞひらくる(統千載) 入道授政左大臣
- 85 紫の雲をもかくしてまち見ばやいほりの軒にかかる藤浪(統千載) 入道前太政大臣
- 86 此世より蓮の糸にむすばほれ西に心のひく我身かな(新統古今) 後京極授政前太政大臣
- 87 儂くぞ傾く月をしみけるさこそは西へゆかまほしけれ(新千載) 六条入道前太政大臣
- 88 一声に三の心のありとだに頼まぬ程や猶迷ひけむ(新千載) 円光院入道前関白太政大臣

89 藤の花わがまつ雲の色なれば心にかけて今日
もながめつ (続千載) 三品法親王覚法

90 へだてなき心の月は紫の雲とともにぞ西へ行
きける (続千載) 入道二品法親王覚性

91 西へ行く月に契りてむすびても心にかかる紫
の雲 (新千載) 入道二品親王性助

92 徒に又このたびもこゆるぎのいそがで法の舟
におくるな (新拾遺) 欣子内親王

93 阿弥陀仏と唱ふる声に夢さめて西へかたぶく
月をこそ見れ (金葉) 選子内親王

94 露のみに結べるつみはおもくとももらさじも
のを花のうてなに (新後撰) 式子内親王

95 たのむぞよ五つのさはりかくともすてぬ仏の
誓ひ一つを (新千載) 徽安門院

96 皆人のゆきて生まるるやどりこそうき世のさ
がの西にありけれ (新統古今) 後小松院

97 言の葉にみつととけども一すちにまことをい
たす心なりけり (新統古今) 後嵯峨院

98 にしへとやみ法のかどを教ふらむささだちて
ゆく秋の夜の月 (新拾遺) 土御門院

99 あだにちる花みるだにもあるものをたからの
うゑ木思ひこそやれ (続古今) 花山院

100 一つのまにいとふ心をかつ見つつはちすにお
かば我身なるらん (新拾遺) 仁明天皇

○ 「解説」緑色表紙袋綴一冊、22.5cm×15.5cm題
簽に「釈門宗依百人一首全」とあり、(筆書き)
宗依は宗派の誤か。序なし、この書名、跋によ
れば「浄土百歌仙」と云う。諸家蔵の「二十一
代集釈教浄土百歌仙」もこの書と同じか本。文

異種百人一首十種 (三)

五十丁、跋一丁。神仏はその景観を、人は出像
近藤伊一(墨山行年六十五)画道に書。聖衆來
迎葬蔵版、真崎普房彫とあり。安政三丙辰の
跋。

大ナル哉和歌ノ徳タル、天地ヲ動カシ鬼神ヲ
感ゼシメ人倫ヲ化ス。茲ニ今、二十一代和歌
集釈教ノ中、我が浄土法ニ係スル者百首ヲ抄
出シ、歌人ノ肖像ヲ模写シ、勒シテ一卷ト為
シ、名ツケテ浄土百歌仙ト曰ヒ、以テ童蒙ノ
玩弄ニ備フ。視聴ノ備ヲシテ勝縁ヲ無量寿ノ
淨域ニ結バシム。嗟乎仏種ハ縁ヨリ起ル、其
誰此是ナラズト謂ハン。時ニ安政三年次丙辰
仲春、尾陽隱衲某跋。

「釈教歌」という部立が、勅撰集にあらわれ
ない拾遺集廿の末尾のところには
性空上人のもとに詠みて遣しける

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照ら
せ山のはの月 雅致女式部

極楽をはるけきほどと聞きしかどつとめて到
る所なりけり 仙慶 法師

市門に書き付けて侍りける
一度も南無阿弥陀といふ人のはちすの上のの
ぼらぬはなし 空也 上人

光明皇后山階寺にある仏跡に書付給ける
みそちあまり二つのすがたそなへたる昔の人
の踏める跡ぞこれ 大僧正行基よみ給ひける

法華経をわが得しことはたき木こり菜つみ水
くみつかへてぞ得し

百くさに八十くさそへて給ひてしちぶさの報
いけふぞわがする

南天竺より東大寺の供養にあひに菩提が
渚に着きたりける時よめる

靈山の釈迦の御前に契りてし真如くちせずあ
ひ見つるかな

迦毘羅衛に共に契りしかひありて文珠の御顔
相見つるかな (返し) 波羅門僧正

というような歌があらわれている。その歌の撰
集後拾遺集になると、釈教歌の部立が見え、

山階寺の涅槃講にまうでて読侍りける
いにしへの別れのにはにあへりともけふの涙
ぞ泪ならまし 光源 法師

という、仏事仏道関係の歌が輯められ、句題和
歌の様に、「維摩経の十喻の中に此身如芭蕉と
云心を」とか「同喻の中に此身如水月といふ心
を」「三界唯一心」などいわれる釈教歌がかた
まって来る。然し金葉詞花は釈教を部立しない

が、釈教歌はある。千載は然し十九全巻を神祇
の前に、新古今は神祇を十九に、釈教を二十にお
く、新勅撰、続後撰は部を立てず、続古今は神
祇のあとに釈教を立てる、と云った風にあつか
いはまちまちであるが、歌と釈教は、仏教と生
活がはなれないようになった。

この百人一首に夢託とか託宜の歌、または神
仏の顕現として虫蝕によってあらわれた歌など
が入っている。勅撰集には、しばしばあらわれ
る処である。和泉式部の沢の螢に対して貴船明
神の「奥山にたざりておつる滝つ瀬の玉ちる如
く思な思ひそ」など知られている。

六七

心学絵入 道歌百人一首

守本恵観編輯
明治十九年九月刊

- 1 風は息月日はまなこ躰は土海山かけて吾身なりけり
- 2 草枕只かりそめに迷ひいでてあはれ幾世の旅寝しつらむ
- 3 這へば立て立てば歩めの子を思ふ我が身に積る老を忘れて
- 4 心とはいかなるものをいふやらむ墨絵に書きし松風のおと
- 5 かりそめも此の世の事をたのまずば秋も嬉しくおぼしめすらむ
- 6 何事も今日の歓楽すぎぬれば必ず明の日苦難とぞなる
- 7 古も今も変らぬ天地の御たまといへど知る人ぞなき
- 8 池水は人の心に似たりけり濁り澄むこと定めなければ
- 9 わけのぼる麓の道は多けれど同じ高根の月を見るかな
- 10 誰も皆人は裸で尊とかれそれが生れのままの元根ぞ
- 11 老いぬれば心ばかりもよわりゆく心の修行もわかきうちなり
- 12 生れ来ぬ先も生れてすめる世も死んでも同じ神のふところ
- 13 山川の末に流るる柵殻も実をすててこそ浮む瀬はあれ
- 14 井戸ばたで遊ぶ子よりもあぶなきは道を求めぬ人の身のうへ
- 15 朝起きや身をはたらいて小食に忠孝あつくやいとする人
- 16 仮初にかけを我ぞとあやまりて真のすがたを知らぬあはれさ
- 17 美しき蒔絵の箱もわらずともその善悪は内にこそあれ
- 18 我が身だに吾が儘ならぬ世の中に人の背くはとがならばこそ
- 19 吾といふ人形つかふものはたぞ事々物々に氣をつけて見よ
- 20 指を見よ貪欲瞋恚愚痴の三つ慈悲と智恵との二つなきなり
- 21 聞きわくる心の内の誠こそ教へによらぬ悟りなりけり
- 22 今のみと思ひて父母につかへただ後の頼みぞしらぬ世の中
- 23 上見れば欲しい惜しいの罪だらけ笠きてくらせおのが心に
- 24 心せよ遣ふも人の思ひ子を吾が思ひ子に思ひくらべて
- 25 住みなれて後もこころのかはらねばなほ山里も憂き世なりけり
- 26 おのづから我をはなれてみどり子となりて教へにまかせ皆人
- 27 水干たる池にうるほふしたたりを命とたのむうろくづや誰
- 28 あるほどの不浄を包む皮袋うはべの色に迷ふはかなさ
- 29 喰ふものも喰はずに金の番をして死ぬまで樂を知らぬ世の中
- 30 たんのうをするとおのが胸のうち地獄もあれば極楽もあり
- 31 人ごとにかはるは夢の迷ひにてさむれば同じころなりけり
- 32 心とてげにはこころのなきものを悟りはなんのさとりなるらむ
- 33 昔よりお福は人がほれるのになぜにお徳はきらはるるやら・福徳の表は徳にあるものを福でなければよろこびもせず
- 34 堪忍といへば安きに似たれども己に勝つのかへ名なりけり
- 35 吹く風に浪の立ち居はしげけれど水よりほかの物にやはある
- 36 恨むなよ月と花とを詠めても惜しむ心は思ひすててき
- 37 盗みせず人殺さぬを能にして我れ罪なしといふぞかなしき
- 38 よしあしは人にはあらで我にあり形直くて影はまがらじ
- 39 山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かと思ふ母かと思ふ
(行基菩薩)
- 40 わが物の人のものといふ物のやがて世界のものとなる物
- 41 夏虫の一つおもひにこがれては身をいたづらになすぞはかなさ
- 42 木の実をば猿に食はせて猿にまた此の身食はせてもらふ猿ひき
- 43 西東千里あゆむも善悪もまた一念はみなみにぞある

- 44 かばかりのことはならひとゆるしおくこころ
の末のおそろしきかな
- 45 我とわが心のかげと写し絵の鬼も仏も筆のま
にまに
- 46 道といふ言葉に迷ふことなけれ朝夕己がなす
業と知れ
- 47 数ならで心に身をは任せねど身にしたがふは
心なりけり
- 48 明日よりはあだに月日をおくらじと思ひしか
どもけふも暮れゆく
- 49 牛馬は皆うしうまと呼ぶるれど人の人たる人
ぞすくなき
- 50 雨あられ雪や氷とへだつれどとくれば同じ谷
川の水
- 51 心とはいかなる物をいふやらむ目には見えね
ど天地一ぱい
- 52 恋せずは人は心もなからまし物のあはれはこ
れよりぞ知る
- 53 心なき植木も法をとくなれば花も悟りをさぞ
開くらん
- 54 徒らになすことなくて過ぎにけり思へは惜し
き身のくらしかな
- 55 三度食ふ飯さへこはしやはらかし思ふままに
はならぬ世の中
- 56 手も出さず頭も出さず尾もださず六つを治む
る龜は万年
- 57 引く綱のたゆむ間もなく夜とともにかせぐ舟
子を学べ世渡り
- 58 使はるる神のきづなを忘れてもおのれ動くと
思ふ猿かな
- 59 芳野川その水上をたづぬれば葎のしづく萩の
した露
- 60 いたづらに過ぐる月日は多けれど道を求むる
時ぞすくなき
- 61 誠ほど世にもたふとき物はなし誠一つぞ四海
兄弟
- 62 煤はきの人たてたるすゑ風呂はよごれぬ且
那さきに入るなり
- 63 たれもみな満つればやがて欠くる月いざよふ
空や人の世の中
- 64 奉公の始めの心忘れずば終に吾が世もゆたか
なるべし・嫁入の其の日の心わすれずば聾姑
にきらはれはせじ・聾や嫁もらひし時の心な
ら鬼ばばなりと人は云ふまじ
- 65 清くすむ心の底を鏡にてやがてぞ写る色もす
がたも
- 66 憂き世かなよし野の花に春の風しぐるる空に
有明けの月
- 67 我がものと思へどままにならざるは自由自在
の心なりけり
- 68 怠らず行かば千里の外も見む牛の歩みのよし
遅くとも
- 69 薬といふものをもとむる心こそ身を苦しむる
かたきなりけり
- 70 妻ならはいせすばすそも合はざらむ裏は表に
任す身なれば
- 71 面影は田毎の水にうつれどもすみぬる月は二
つともなし
- 72 枝葉よりとかく心の根が大事万能よりも一心
をしれ
- 73 主に忠親に孝行する人は祈らずとても福寿あ
たへむ
- 74 むなしくて一夜の夢はおどろくに長き迷ひぞ
覚むるかたなき
- 75 顔や手のよごれは常に厭へども心の垢をすす
ぐ人なし
- 76 憎むともにくみかへすな憎まれてにくみ憎ま
れはてしなれば
- 77 限りある命をさすが長らへて何のためともな
き我が身かな
- 78 年ごとにさくや吉野の山ざくら木をわりて見
よ花のありかを
- 79 寝る間のみ人にかはらぬ思ひ出を憂き世にか
へす暁の鐘
- 80 慎しめよほたるほどなる煙草の火心ゆるせば
早鐘の音
- 81 形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさば
なりなん
- 82 わがままに人の心の傀儡師鬼餓鬼出せば仏か
くるる
- 83 明けくれの鐘は枕にひびけどもうき世のゆめ
は覚めむともせず
- 84 おどろかす甲斐こそなけれ村雀耳なれぬれば
鳴子にぞ来る
- 85 桜をばなに憐しと思ひけむ人をも花はさこそ
見るらめ
- 86 長き夜のあけゆく月を詠めても近づく闇を知
る人ぞなき
- 87 親と子は次第おくりと知るならば次第おくり
に孝行をせよ

88 植ゑてみよ花のそだたぬ里もなし心からこそ

身はいやしけれ

89 けれどもと一足づつは踏みとまれ欲しい惜しいの世の渡り川

90 欲ふかき人の心と降る雪は積るにつけて道を忘るる

91 歎くぞよ鏡のかけを朝ごとに積りてよする雪と波とを

92 へだてぬる地獄天堂よく見ればただ一心の所業なりけり

93 算盤にかからぬものは無常にて二八も九九も同じ年なり

94 善きことは見ても聞きても悪しきこと見ざる聞かざるいはざるぞよき

95 安樂の伝授といふは覚悟なりただ不觉悟が身をばくるしむ

96 つくづくと思へばかなしいつまでか身につかはる心なるらむ

97 鏡山人の志賀からさき見えて我が身の上をかへりみづうみ

98 夕すずみ夏の暑さは忘るとも御上の恩のあつさわするな

99 極楽も地獄も己が身にありて鬼も仏も心なりけり

100 闇の夜に啼かぬ鳥の声きけば生れぬ前の父ぞ恋ひしき

○

〔解説〕文様入茶紙表紙袋綴木版一冊 (16cm × 22.5cm) 題簽「心学絵入道歌百首和解全」表紙裏赤紙。中央に題簽と同じ題を出し、守本恵観

編輯、信行社蔵。両わきに義信親別序と各小画を出す。茂世画とあるは本文の画も然るか。上に明治十九年刻版とあり。端書と自序二丁。本文五十丁。歌を上欄、さし画あり。歌にちなむ心学の道話をかかげる。刊記、明治十九年九月七日出版届同月廿六日刻成。著述出版人、上京区第廿三組龜屋町廿七番戸(京都)平民守本恵観。売弘所沢田友五郎(京都)外。彫刻人森治助 京都信行社蔵版。はじめ端書。

(前略) 昔も此日本へ渡り来し唐僧の和歌の徳を感じて仏家の陀羅尼にひとしと云しが如く僅か卅一音の内に無量の哀れを籠め、教を含みて其意を人の精神に達する事万言に勝るなど、げにも言霊の幸ふ国の扶けにぞ有ける。故此守本大人の教へ書は何れも仮名書なる上に、俗語を専とせられ、又此書は今一きは人心に入易からしめむとて、かの先哲の道歌百首をぬき出で是を解き和らげ亦これによそへて教へられし仁恵何に譬へてか言はむ。殊に大徳の高師高僧達の人を救はむとして詠み出られし歌の意を聞き得る人の為には、一首万巻の教へ歌なるぞかし。さればかの肉躰の欲に身を亡し或は名に迷ひて真理を失ひ、愛着に引かれて命をすて將遣ふべき財宝の為につかはれて清き靈魂を穢し等する貪欲愚痴の人心を転ぜしめて固有の本性に立帰らしめんとての大慈悲心より出たる歌なれば心の鬼も是によって忽ち本善の性に立還らざる者あらじと云々。明治十九年秋。桜ぞのの主人た

とあり、つづいて自序

今度此書に和解する処の百首は、世に名高き古人の道歌なれ共、只口に唱へ耳に聞馴たるのみにして、其実に意をとめ、今日の勤行とする人少なく亦自己の本心と覚知する人も稀なれば、予が如き無学の者ながらいささか其大意を註解して責ては主親に仕ふる輩亦是山辺海浜に住て勤学の暇なき人達へ會得仕易かれとてわづか半枚の中に画をさへ加へたる短文なれば思ひの儘には述難しと雖も、乞願はくは予が拙きを咎めずして只慈悲広大なる名歌の深実在意をとめて其恩恵に報い給はむ事を。信行社々長守本恵観しるす。

本文一頁一首を原則とするが、二首、三首と併記したところもある。道話は懇切である。

お互に安堵して起臥のゆたかに出来るのは、大平の御代とは申ながら是全く御仁恵御政道の正しき御恵みによってなり、中には御一新を悦ばず、彼是不足をいふ者も有ると聞きますが……万物の宝を万民の為に保護し御司配下さる御上なれば……此御広恩はいひもつくされぬこと也云々

とあるなど、当時の庶民の思想が伺える。掲げた歌についていえば、33には二首、64には三首を並記しているの、これを教に入れれば百三首になるが、これも一項として百首となるつもりである。心学道話は平明な文章で、その中にも歌を引くことが多く、無学の者にも解るようにとの心遣いをしている。明治維新後における新政道に協力しようとしたものがある。

家庭歌訓修身百首

杉谷正隆撰
明治三十年十月刊

- 1 天つ神国つやしをいはひてぞわが芦原の国はをさまる 後宇多天皇
- 2 みな人の祈る心もことわりにそむかぬ道を神やうくらむ 藤原 為守
- 3 もろこしの代々はうつれど敷島や日本島根は久しかりけり 土御門内大臣
- 4 神代より三種の宝つたはりて豊芦原のしるしとぞなる 従一位教長
- 5 織りいづる高麗もろこしのしなはあれどやまと錦にしくものぞなき 平 春海
- 6 天地の神のかためし御国とてをかしはてたるえみしをも見ず 左中将基綱
- 7 照りくもり寒きあつきも時として民にこころのやすまもなし 光厳 天皇
- 8 世をさまり民やすかれと祈るこそ我が身につきぬ思ひなりけれ 後醍醐天皇
- 9 夜を寒みねやのふすまのさゆるにもわらやの風を思ひこそやれ 後鳥羽天皇
- 10 怠らず祈るも御代のためなれば君と神とに身はつかへつつ 津守 国夏
- 11 天の下誰かはもれむ日のごとくやぶしもわかぬ君がめぐみは 大江 宗秀
- 12 もののふの臣のをのこは大君のまけのまにまにきくとふものぞ 読人しらず
- 13 今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯といでたつ吾は 今奉部与曾布
- 14 大君のみことかしこみ磯にふりうの原わたる

父母をおきて

丈部造人麿

- 15 山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも 源 実朝
- 16 君が為世の為何かをしからむ捨ててかひあるいのちなりせば 宗良 親王
- 17 ありて身のかひやなからむ国の為民のためにと思ひなさは 宗尊 親王
- 18 思ひかね入りにし山を立ちいでて迷ふうき世もただ君の為 藤原 師賢
- 19 たたなめて泉の川のみをたえず仕へまつらむ大宮どころ 境部宿祢老麿
- 20 御民われ生けるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば 海犬養宿祢岡麿
- 21 君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで 読人しらず
- 22 白金も黄金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも 山上 憶良
- 23 世の中に思ひあれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな 紀 貫之
- 24 人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな 兼輔 朝臣
- 25 久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな 菅原道実母
- 26 旅人のやどりせむ野に霜ふらば我が子はぐくめ天のたづむら 読人しらず
- 27 真木柱ほめて作れる殿のごといませ母刀自面 坂田部首磨
- 28 春草は後ほうつろふいはほなす常盤にいませ 尊きわぎみ 市原 王
- 29 おほし立てし親なかりせばいかにして君の恵

みを吾は受くべき

平 景隆

- 30 家富みてあかぬ事なく仕ふとも報いむものか親のめぐみは 小沢 芦庵
- 31 人の子の親になりてぞ吾が親の思ひはいとど思ひ知らるる 康資王 母
- 32 やや積る我が身の年を思ふにもまづたらちねの考ぞ悲しき 鶴 若丸
- 33 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも棒ごてゆがむ 丈部 黒当
- 34 父母が頭かきなで幸くあれて言ひし言葉ぞ忘れかねつる 丈部 稻麿
- 35 限りあれば今日ぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり 藤原道信朝臣
- 36 ありし世の親の諫めのままならば悔しく身をば嘆かざらまし 前大納言為氏
- 37 たらちめはかかれとしてしもぬば玉のわが黒髪を撫でずやありけむ 僧正 遍昭
- 38 難波人あし火焚く屋の煤したれどおのが妻こそとこめづらしき 読人しらず
- 39 大伴のみつの浜なる忘貝家なる妹を忘れて思へや 身人部王
- 40 我が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに 安部 郎女
- 41 しき島の大和の国に二人有りとし思はば何か嘆かむ 読人しらず
- 42 荒磯こえ岩うつ波の外心われは思はじ命しぬとも 読人しらず
- 43 君をおきて仇し心をわが持たば末の松山波もこえなむ 読人しらず
- 44 古へもたぐひもあらじ我が宿に枝をつらぬる

柏木のかげ 前大納言光頼

を持ためや 伏見 天皇

かざらまし 正三位成実

45 武蔵野の若紫のころもではゆかりまでこそ嬉しかりけれ 大宰大貳重家

60 わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をば思ひすつべき 紫式部

75 一筋に人をも身をも思ふかなうつ墨繩の直かれとのみ 前中納言定房

46 新しき年の始に思ふどちい群れて居れば楽しくもあるか 大膳大夫道親王

61 ますらはは名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね 大伴 家持

76 野辺に生ふるいささ群竹いささめも人の為よきことはかりせよ 橘 枝直

47 死にも生きも同じ心と結びてし友やたがはむ吾もよりなん 読人しらす

62 子を思ふ心の道の心もて親に仕へよ世の中の人 少将源定信

77 竹の根の下はひわたるふしの間もけふの日かげをあだに暮らすな 橘 千蔭

48 なにせんにたがひは居らずいなもうも友のなみなみ吾もよりなん 読人しらす

63 思へただ心なぎさの鴛鴦だにもよその妻にはながれあふかは 越前 前

78 急がすば濡れざらましを旅人のあとより晴るる野路の村雨 源 持賢

49 世の中に嬉しきものは思ふどち花見てくらす心なりけり 平 兼盛

64 女郎花多かる野べに宿りせばあやなくあだの名をや立ちなん 小野 美樹

79 武士の矢はせの舟ははやくとも急がばまはれ瀬田の長橋 源 俊頼

50 君の為民のためぞと思はずは雪もほたるも何か集めむ 大納言師兼

65 形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん 源慶 法師

80 末つひに海となるべき山水もしばし木の葉の下くぐるなり 伴 蒿 蹊

51 浜千鳥ふみおく跡の積りなばかひある事にあはざらめやは 後白河天皇

66 手折らじな人の垣根の梅の花吾にて知りぬ惜しき心は 寂身 法師

81 底ひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあだ浪はたて 索性 法師

52 集めては国の光となりやせんわが窓てらす夜半のほたるは 後龜山天皇

67 色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける 小野 小町

82 世を捨てて山に入る人山にても猶うき時はいづち行くらむ 凡河内躬恒

53 写しおきて神代の事もくもりなき書こそ道の鏡とは見れ 儀同三司実蔭

68 あとまきの後れて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞきく 大江 千里

83 天雲のたえずたな引く峯にだに住めば住みぬる世にこそありけれ 惟喬 親王

54 踏みわけよやまとはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは 荷田 春満

69 雪ふりて年のくれぬる時にこそつひに紅葉ちぬ松も見えけれ 読人しらす

84 手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける 読人しらす

55 千万の軍なりとも言挙せず取りて来ぬべき男の子とぞ思ふ 高橋 虫麿

70 あまの刈る藻にすむ虫の我がらとねをこそ泣かめ世をばうらみじ 典侍藤原直子

85 ひとへなる人もぞあると世を知ればうすき衾もさえぬ夜半かな 多々良政弘

56 かへらじとかねて思へば梓弓なき数にいる名をぞとどむる 楠 正行

71 津の国のなにはのことにつけつともよしをばあしと云ひな隠しそ 源 家長

86 いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことと葉うれしからまし 読人しらす

57 かかる時さこそ命の惜しからめかねてなき身と思ひしらずば 源 持資

72 心だにわが思ふにはかなはぬ人を恨みむことわりぞなき 従二位為子

87 世の中に虎狼はなならず人の口こそ猶まきりけり 藤原 良経

58 虎ほゆる国の境も武士の守るかぎりは安けかりけり 小野 古道

73 己が身の己が心かなはぬを思はば物は思ひしりなん 和泉 式部

88 唐土の虎ふす野辺に吹く風の目に見ぬところ恐しの世や 香川 景樹

59 天つ空照る日の下にありながら曇る心のくま

74 一筋に思ひ定むる心だにあらばうき世をなげ

89 なき名ぞと人には言ひてありぬべし心とは

ばいかがこたへむ

読人しらず

90 ますらをにしか待つことのあればこそしげき

嘆きも堪へしのぶらめ

藤原 俊成

91 あしびきの山を抜くてふ手力も身には思はず

心にもがな

阿闍梨契沖

92 飛驒たくみほめて造れる真木柱立てし心は動

かざらなん

加茂 真淵

93 立てそめし志だにたゆますは竜のあぎとの玉

もとるべし

大国 隆正

94 雲となり或は雨とも降りしきて神代の道に身

をや尽くさむ

平田 篤胤

95 もろこしも天の下にぞありと聞く照る日の本

を忘れざらん

成尋法師母

96 しきしまの大和心を人とはば朝日ににほふ山

桜ばな

本居 宣長

97 いくそたびかきにごしても澄みかへる水や御

国の姿なるらむ

八田 知紀

98 ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひて行

くなますらをの伴

聖武 天皇

99 持つ人の心によりて宝ともあだともなるは黄

金なりけり

皇后宮御歌

100 千早振神ぞ知るらむ民の為世を安かれと思ふ

心は

今上 御製

○ 「解説」 「家庭歌訓修身百首」一冊。洋綴活版

本、杉谷正隆著。明治三十年十月七日、国光社刊。東久世通禧の題字（厚人倫成孝敬）、坂正臣の序を巻頭におき、はじめに例言あり、中に小倉百人一首は歌詠としては珠玉の作であるが家庭のもてあそびぐさとしては必ずしも適当で

ないのでこれに代えて撰んだといひ、

敬神・国体・君恩・親恩・忠・孝・友・和・

信をはじめ、貞操・節儀・礼儀・廉恥・剛毅

忍耐・正直・謹身・勤勉・遵法・博愛・度量

怨などの諸徳に従ひて序列せり。其の意を同

じくするものは成るべく同じところにあげた

る明倫歌集の体裁の如し。

といひ、風俗を正し世道を保つ旨を以て撰んだ

ことを明らかにしている。そして、本文は、は

じめ歌をあげ、歌意を述べ、歌句を解釈し、次

に歌にそつて明倫の言を撰者の意見として詳述

している。百五十五頁にわたっている。各歌平

均一頁半を費している。たとえば比較的短い、

本居宣長の歌の余論の部分を見て見ると、恰

我が国の人心の、古より優美高尚にして、恰

も彼の桜花の朝日に匂へるが如きは、世界各

国、何処の浦を求めても決してあるべからざ

るものなり。君として臣を憐れみ、臣として

君に忠を尽し、親は子を愛し、子は孝に親に

仕へ、兄弟和睦しくして、夫婦相和ぎ、長幼

礼を正しくして、朋友信を重んじ、義理を弁

へ、廉恥を知り風俗純白にしてし習慣敦厚な

り。恰も春の花の匂ひのどけく、秋の紅葉の

照りががやけるが如し。是れ即ち大和心の外

に現はれたるものにして、君子国の称ある所

以なり。然るに近頃西洋の風俗習慣次第に浸

漸して大和心を失はしめ、君子国の称を奪ひ

去らんとする勢あり。若し此の大和心を失は

んか、我が国は我が国たる事を得ざるに至る

べし。大和民族たるもの、宜しく此に注意し

て、各其の心を正して、朝日に匂ふ山桜花の
如くならん事を期すべきなり。

とある如く、時に日清戦争後、国民意識の高揚
の時代でもあったが、保守的国粹論がこの一卷
にみなぎっている。

天皇は、後宇多天皇、光厳天皇、後醍醐天

皇、後鳥羽天皇、後白河天皇、後龜山天皇、伏

見天皇、聖武天皇、今上天皇、皇后。皇族は宗

良親王、宗尊親王、身人部王、道親王、惟喬親

王、の五人。その他の歌人では、万葉集以下近

世に至る各時に亘り、近世では小沢芦庵、荷田

東満、小野古道、橘枝直、橘千蔭、村田春海、

伴蒿蹊、香川景樹、阿闍梨契沖、賀茂真淵、大

国隆正、平田篤胤、本居宣長、八田知紀の十三

人を数える。万葉集からは、読人しらず八人の

ほか、聖武天皇、家持、虫麿、安倍郎女、身人

部王、文部稻麿、文部黒当、市原王、坂田部首

鷹憶良、海犬養岡麿、境部老麿、文部造人麿、

今奉部与曾布、十四人、あわせて二十二に及ん

でいる。万葉がまだ、そのようにはもてはやさ

れなかつた時代においてこれだけの歌を撰び入

れたところに、この撰者の考え、復古といった

ものがうかがえる。日清戦争によって、国民精

神が高揚すると共に、一方には欧化主義がみな

ぎつて、新しい時代における物心二面における

混乱がおこつて来た。こうした時代における一

つの指針を示そうとする意図があらわれている。

これは国学者の系統を引いた日本主義一遍

到になつていて、欧風をとり入れようといった

進歩的な面には、ことさら耳をおおっている。

和魂百人一首

高柳秀雅撰
明治三七、二刊

- 1 君のため世のため何かをしからむすててかひある命なりせば 宗良 親王
- 2 つくづくと思ひ暮らして入り相の鐘をきくに も君ぞ恋しき 恒良 親王
- 3 われはもよ安見兒得たりみな人の得がてにす とふやすみこ得たり 藤原 鎌足
- 4 白金も黄金も玉も何せむにまされる宝子にし かねやも 山上 憶良
- 5 釵太刀いよとぐべし古へゆさやくおひて 来にしその名ぞ 大伴 家持
- 6 韓国の城のへに立ちて大葉子はひれをふらす も日本へむきて 大葉 子
- 7 千万のいくさなりとも言挙げせずとりて来ぬ べき男の子とぞ思ふ 高橋 虫麿
- 8 思ふこと言はでをただに止みぬべき我とひと しき人しなれば 在原 業平
- 9 海ならずただよふ水の底までも清きころは 月ぞ照らさむ 菅原 道真
- 10 見し人の煙ときえし夕べより名もむつまじき 塩釜の浦 紫式部
- 11 代らむと祈る命はをしからでさても別れむこ とぞ悲しき 赤染 衛門
- 12 吹く風をなこそその関と思へども道もせに散る 山桜かな 源義家
- 13 君が代は久しかるべし度会や五十鈴の川の流 れたえせで 大江 匡房
- 14 ちちとのみ啼きくらすまに簑虫のこゑよわり ゆく秋の夕ぐれ 平 重盛
- 15 ささ彼や志賀の都はあれにしを昔ながらの山 ざくらかな 平 忠度
- 16 しづやしづしづのをだまきりかへし昔を今 になすよしもがな 静
- 17 露ふかき浅茅が原にまよふ身のいとどやみち に入るぞ悲しき 袈 装
- 18 わたるより深くぞ頼む鞆子川親のかたきにあ ふせと思へば 曾我 時致
- 19 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心 われあらめやも 源 実朝
- 20 大海の潮ひて山になるまでに君はかはらぬ君 にましませ 西 行
- 21 勅なれば身をばすててき武夫の八十うち川の 瀬にはたたねど 鏡 月
- 22 吾が兒ども君につかへむ為めならで渡らまし やは関の藤川 阿 仏尼
- 23 思ひかね入りにし山をたちいでてまよふうき 世もただ君のため 藤原 師賢
- 24 いかにかせむたのむ影とてたちよればなお袖ぬ らす松のした露 藤原 藤房
- 25 武夫の上矢のかぶら一すちにおもふ心は神ぞ しるらむ 菊池 武時
- 26 深きふちうすき氷のいましめも心につかけぬ人 ぞあやふき 楠 正成
- 27 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名 をぞとどむる 楠 正行
- 28 わが袖の涙にやどるかげぞとも知らで雲井の 月やすむらむ 新田 義貞
- 29 片糸の乱れたる世を手にかけてくるしきもの は我が身なりけり 北畠 親房
- 30 かかる時さこそ命のをしからめかねて無き身 と思ひ知らすば 太田 道灌
- 31 ちる花をながめずしもや里人がただ春雨に小 田かへすらむ 毛利 元就
- 32 武夫の鎧の袖をかたしきて枕にちかき初雁の こゑ 上杉 謙信
- 33 我が君の命にかはる玉の緒をなといとふべき 武夫の道 鳥居 勝商
- 34 冴えのぼる月にかかれる浮雲のすゑ吹きはら へ四方の秋風 織田 信長
- 35 人は皆さしいづるこそよかりけいくさの時 もさきがけにして 豊臣 秀吉
- 36 影清き月のかがみのくもらめや名はちりの世 の秋うつるとも 加藤 清正
- 37 先だつは同じ限りの命にもまさりて惜しき契 りなりけり 細川忠興夫人
- 38 いづるより入る山端のはいづくぞ月に問は ばや武蔵野の原 伊達 政宗
- 39 みなちりし後をそめむと紅葉のあさきはふか き心なりけり 徳川 光圀
- 40 ながらへて花まつべき身ならねどなほ惜まる る年の暮かな 大石 良雄
- 41 憂きことのならほ此の上につもれかし限りある 身の力ためさむ 熊沢 蕃山
- 42 玉銚のみちある国にたづね来てうてはこたふ る拍手のこゑ 山県 大弐
- 43 ふみわけよ日本にはあらぬから鳥のあとを見 るのみ人の道かは 荷田 春満
- 44 飛田たくみほめてつくれる真木柱たてし心は

- 動かざらまし 加茂 真淵
45 しき島の大和心を人とはば朝日に匂ふやまごくら花 本居 宣長
46 雲となりあるは雨ともふりしきて神代のみちに身をやつくさむ 平田 篤胤
47 梓弓むかしをひくも武夫のみちはまことにたけかれとのみ 斎藤 拙堂
48 このふねのよるてふことを夢のまも忘れぬは世の宝なりけり 松平 定信
49 やき鎌のと鎌をもちてかりはらひ茂る葎の道ひらきせむ 中山 愛親
50 春の野にめだつ草木をよくみればさりぬる秋の種にぞありける 二宮 尊徳
51 麻縄にかかる身よりも子を思ふおやの心をとくよしもがな 渡辺 華山
52 ゆく末を思ひまはせばをだまきのいとあはれなる大和なでしこ 高野 長英
53 われをわれと思ぼしめすかや皇の玉の御こゑのかかるうれしさ 高山 正之
54 親もなし妻なし子無し板木なし金もなければ死にたくもなし 林子 平
55 国のため君のためとしおもはずば雪も螢もなにかあつめむ 蒲生 君平
56 敵あらばいでもののみせむ武夫のやよいなかばのねぶりさましに 徳川 斉昭
57 見せばやな心のくまも月影もすみだ川原の秋の夕ばえ 藤田 東湖
58 桜田の花とかばねはさらすともなどたゆむべき大和魂 佐野竹之助
59 近江の海いそうつ浪のいくたびかみ代に心をくだきつるかな 井伊 直弼
60 老の身のはつる命はをしからで世にいさほしの無きぞかなしき 佐久間象山
61 身はたとひ武蔵の野べにくちぬともとどめおかまし大和魂 吉田 松蔭
62 古への道をききてもとなへてもわが行ひにせずばかひなし 島津 斉彬
63 おのがままおい茂りたる武蔵野にわが大君のみち開かばや 千種 有功
64 君が代をおもふ心の一筋にわが身ありとも思はざりけり 梅田 雲浜
65 我がつみは君が代おもふま心のふからざりししるしなりけり 頼三樹三郎
66 古へに吹きかへすべき神風も知らで江みしら何さわぐらむ 姉小路公知
67 弓矢とる身にはあらねど皇につくす心は人におとらじ 長尾 武雄
68 世の中にあらむ限りは正しきと直きをまもるほかなかりけり 宇喜田一蕙
69 そらかけるたまのゆくへや九重のみはしのもとのあたりなるらむ 大橋 卷子
70 皇のみちしるき世をねがふかなわが身は苔の下にふすとも 中山 忠光
71 君がためいのち死にきと世の人にかたりつぎてよ峯の松風 松本 奎堂
72 みすふかく時のきざみのことばして今やさくらむ九重の花 藤本 鉄石
73 くもりなき月をみるにも思ふかなあすはかねの上を照るやと 吉村寅太郎
74 君が代はいはほと共に動かねばくだけてかへれ沖つ白浪 伴林 光平
75 大君のためには何かをしからむさつまのせとに身はしづむとも 月 照
76 心のみおもひこがして文机のふみを見るさへものうかりけり 沢 宣嘉
77 天つ風ふけや錦の旗の手になびかぬ草はあらじぞ思ふ 平野 国臣
78 ことしあらばよしやしのにまよふともみみわけて見む花のしら雪 武田耕雲斎
79 かねてより思いそめてしま心を今日大君につげてうれしき 藤田小四郎
80 君がためつくせやつくせおのが身のいのち一つをなきものにして 国司 信濃
81 ほととぎす血になくこゑは有明の月よりほかに知る人ぞなき 久坂 玄瑞
82 砕けても玉とちる身はいさぎよし瓦と共に世にあらむより 真木 和泉
83 終にゆくみちとはきけど梓弓はるをもまたぬ身とぞなりぬる 大谷 正道
84 ゆく春も心やすげに見ゆるかな花なき里の夕暮のそら 坂本 竜馬
85 国のため囚のうちにしづむともわがたほしひは君をまもらむ 高杉 晋作
86 たぐひなき声を雲井にあげて来し鶴も籠にすむ春ぞわびしき 野村 望東
87 いそのかみふりにし世々のあととひて昔にかへる我が身なりけり 堀 利熙
88 とざしなばうちやぶりてもあふ阪の関には君をとめじとぞ思ふ 三好 監物
89 太刀とるも鋤鋏とるも君がためうつもかへす

も武夫の道

田宮 如雲

90 たてそむる志だに動かずは竜のあぎとの玉も
とるべし 大国 隆正91 皇につかへまつれる我が身ぞと思へばあだに
花もながめじ 毛利 敬親92 晴れてよし曇りてもよし富士の山元の姿はか
はらざりけり 山岡 鉄舟93 上衣はさもあらばあれしき島の大和錦を心に
ぞきる 西郷 隆盛94 もる人のあるかなきかは知らねどもおきわす
れたるなでしこの花 木戸 孝允95 二つなきいのちの限り君のためつくす誠の面
影ぞすれ 野津 鎮雄96 さりともとかきやる浦の藻しほ草たがおりた
ちてかづきあぐらむ 岩倉 具視97 何故にうまれ来し身と知らぬひのしらで消え
ゆく人やなになり 矢野 玄道98 夜よしとも見えぬなかばの秋の月みやこのそ
らはすむやすまずや 島津 久光99 人はよしいかにいふとも開けゆく世の魁はわ
れぞなしけむ 松平 慶永100 月と日の清き鏡にはちざるはあかき心の誠な
りけり 三条 実美【解説】「精神教育和魂百人一首」と題してい
る洋本一冊。撰者 高柳秀雅、明治三十七年二
月十一日、金港堂刊。(二月十一日紀元節)菊
版、一三八頁。附録に女三十六歌仙をつけた。本文は百人一首各々作者の略伝と註解を加え
た。附録もこれにならった。巻頭に教育勅語を
出し、「紫雲のかをり」と題して、後鳥羽、後

醍醐、後村上、光厳、後光厳、後柏原、光格、

孝明、の八天皇と今上天皇皇后の御製及御歌を
更に皇太子同妃の御歌をのせ、東久世通禧の題
字「徳教為本」、千家尊福の題歌「世の塵に曇
りもやせん増鏡ますます磨け大和心を。」本居
豊顕の題歌「日のもとやまと心の万春鏡も
らすべしや世はうつるとも」等をのせ、自序、花は年々同じきを人の心の薄弱にのみ流るる
こそ怪しけれ。言ふ所を聞けば真に善しと聞
えて玉とも錦ともいはばいふべけれど、其心
術に至りては極めて貧しくしてつづれを畳み
たらむが如きは今の人の通弊なり云々と時世を慨し、これを救ふものは教育であり、
その為に流布の力のある百人一首を用いるのは
よいと思うが、小倉百人一首は恋歌が多いので
不適當であり、その他民間に流布する英名百首
武家百首もあるがそれも満足出来ない。そこで
この百首の撰の志をたてたが、時に日清戦争に
応召、軍旗の下に在ってもこの思を断たず、つ
いに初志をとげたと云って、紀元二千五百六十二年：六月廿四日第二の皇
孫の御降誕ありける日、大崎の里に撰みをは
りて、秀雅謹識と結んでいる。百人一首は、一首一頁に作者の
画像と歌、その解説には、略伝と意見をのべて
いる。凡例によれば、作者は皇族二人、公卿二
十人、藩主九人、武将十六人、家臣十一人、前
者十四人、女子九人、僧三人、農二人、商二
人、其他十二人となっており、更に「又地方別
にすれば三府三十三県にわたる。ただし北海道と台湾とのみはその人を欠く」と断つてある。
内容の一端を示すために巻頭宗良親王の頁を掲
げる。君のため世のため何かをしからむすててかひ
ある命なりせば 宗良 親王親王は後醍醐天皇の皇子にして、護良親王の
御弟なり。十歳の時僧となり給ひしが、世の
中乱れに乱れければ、軍に出でて四十年あま
り東西奔走し給へり。此の歌は忠君愛国の重
き訓なり。されば百人中の初めにおくなり。(高鳥帽子に直衣鎧の胴つけた宗良親王像出
下に「近江国井伊谷神社に祭らるる」)

各頁概ねこの様である。

附録、女子教育三十六歌仙(下田歌子閱)

は、(才女)貫之女、清少納言、伊勢御、采女
春日局、倭文子、(母道)道真母、千古母、伊豆
内親王、赤染衛門、阿仏尼、一休母、(貞節)弟
橘姫、花子、静、顕家夫人、忠興夫人、梅田節
子、(孝行)中将姫、妙仲、熊野、小式部、千
枝、若狭(文学)紫式部、お通、玉瀾、蒼生子
蓮月、りん女、(忠義)大葉子、卷子、紅蘭、
村岡、望東、和宮以上を集める。絵像なし。小倉百人一首に対して、恋歌が多いので、こ
れを見女のもてあそびぐさにするのは適當でな
いので、これに代るものを、撰びたいと云った
ことは、かなり多くの異種百人一首の撰者がい
う処で、これもその一つであるが、この撰者
は、明治初年に多く流布した「英名百首」「武
家百首」などにも不満をもらし、日清戦争従軍
以来十分の宿願を上げて撰んだと云っている。

教訓百人一首

後藤和子撰
明治三十九年六月刊

- 1 冬深くねやのふすまを重ねてもおもふは民の
夜寒なりけり 御製
- 2 綾錦とりかさねてもおもふかなさむさ覆はむ
袖なき身を 皇后宮御歌
- 3 吹きさわぐ嵐のやまの岩根まつうごかぬ千代
の色ぞ静けき 東宮御歌
- 4 うるはしき大和錦もしづのめが飼ふこの糸ぞ
始めなりける 東宮妃御歌
- 5 御軍はかち渡りぬと聞くからにまづこそ思へ
益荒男の身を 常宮昌子内親王
- 6 国のため命をすてしますら男のみたまをだに
も慰めてまし 周宮房子内親王
- 7 久かたの天よりおろすたまばこの道ある国ぞ
いまの我が国 後嵯峨天皇御歌
- 8 わが国はあまてる神の末なれば日の本としも
いふにぞありける 後京極摂政前太政大臣
- 9 神代よりみくさのたからつたはりてとよあし
はらのしるしとぞなる 従一位教長
- 10 かぎりなきめぐみを四方にしきしまや大和島
根は今さかりなり 民部卿為定
- 11 いつみてもおなじすがたのふじのねや動かぬ
国のはしらなるらむ 公爵毛利元徳
- 12 いくそたびかき濁しても澄かへる水やみくに
のすがたなるらむ 八田知紀
- 13 天つはのくもらぬ御代の旗風はよろづのくに
の上にあたつらむ 税所敦子
- 14 いたづらにやすきわが身ぞはづかしき苦しむ

民のころおもへば

伏見天皇御製

- 15 けふよりはかへり見なくて大君の醜の御楯と
いでたつわれは 今奉部与曾布
- 16 山はさけうみはあせなむよなりともきみにふ
たごころ我あらめやも 鎌倉右大臣
- 17 君がためよのためなにかをしからむすててか
ひあるいのちなりせば 中務卿宗良親王
- 18 つかふとてまづふみわけし九重の雲の庭の
雪のあけほの 文貞公
- 19 われをわれとしろしめすかやすめろぎの玉の
御声のかゝる嬉しさ 高山正之
- 20 君が為つくせやつくせおのが身のいのちひと
つをなきものにして 国司信濃
- 21 天津風ふけやにしきの旗の手になびかぬ草は
あらじとぞおもふ 平野国臣
- 22 君臣の正しき道を仰ぐぞよまづあら玉の年の
はじめに 有栖川熾仁親王
- 23 君を思ひ民をあはれむ真心のはなはちる世も
あらじとぞ思ふ 侯爵木戸孝允
- 24 いづこにてうたふをきくも君が代を千代と祝
はぬ里なかりけり 公爵岩倉具視
- 25 日にそへてあらたまりゆく君が代のはるの光
りのかぎりあらめや 公爵三条実美
- 26 色かへぬみくにの菊に老が身もちぎりて千代
に宮仕へせむ 男爵元田永孚
- 27 父母がかしらかきなでさきくあれといしひこ
とばぞ忘れ兼つる 丈部稻磨
- 28 たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかり
は関なとゞめそ 小野千古母
- 29 つくづくとおもひくらし入相の鐘をきくに

も君ぞ恋しき

八歳宮

- 30 子を思ふ道にぞいのるすめろぎにつかふる道
をたがへざらなむ 左大弁雅頼
- 31 ひさかたの月の桂もをるばかり家のかぜをも
ふかせてしがな 菅原大臣母
- 32 たちかへりすてし身にもいのるかな子を思
ふ道は神ぞしるらむ 皇后宮大夫俊成
- 33 ひとの親の心はやみにあらねども子をおもふ
道にまどひぬるかな 兼輔朝臣
- 34 たらちねのありしその世にあはれなど思ふば
かりは仕へざりけむ 天台座主道玄
- 35 なげかるゝ身よりもなげく老のみを歎きこそ
すれなげかるゝ身は 高野長英
- 36 親をおもふ心にまさるおやごゝろけふのおと
づれなにときくらむ 吉田炬方
- 37 やくも立ついづも八重がき妻ごめに八重垣つ
くるその八重垣を 須佐之男御詠
- 38 ことたらぬ住居なれどもすまれけり我をなく
さむ君あればこそ 梅田源次郎
- 39 なにごともめしくなにかたゆたはむますら
男のこの妻となる身は 児島草臣妻
- 40 君さそふしるべにぞやるうぐひすもきゐるの
きばの梅のほひを 龜山天皇御製
- 41 のきちかき竹の園生のよの風連るえだにふ
きぞつたへむ 二品法親王尊胤
- 42 新しい年のはじめにおもふどちいむれてをれ
ば楽しくもあるか 大膳大夫道祖王
- 43 おとつひも昨日もけふも見つれどもあすさへ
見まくほしき君かも 橘宿祢文成
- 44 君ならで誰にか見せむ梅の花いろをもかをも

紀友則

しる人ぞしる

もなどかなからむ

も濁らざりける。

権大納言親長

45 思ふどち春の山辺に打むれてそこともしらず

60 よの人におとらじとおもふ一すちは老いもへ

75 手折らじな人の垣根のうめのはなわれにてし

旅ねしてしが

だてぬものゝふの道

少将源定信

りぬをしき心は

寂身 法師

46 よの中にうれしきものは思ふどち花みてくら

61 一すちにおもひ射るやのまことこそ子にも孫

76 こゝろだにまことの道にかなひなば折らずと

す心なりけり

にもつらぬきにけれ

真木 和泉

ても神やまもらむ

読人 不知

47 百千どりこづたふ竹のよのほどもともにふみ

62 敷島のやまとにしきにおりてこそからくれな

77 いそがずばぬれざらましを旅人の跡よりはる

見しふしぞうれしき

るの色もはえあれ

光格天皇御製

る野路のむらさめ

源 持 資

48 都には君をのみこそ思ひいづれもみちのをり

63 あさかやまかげさへ見ゆる山の井の浅きこゝ

78 おほかたの人はことのみによしの川瀬のしら玉

も花のさかりも

ろは我がもはななくに

前 采 女

緒をぬかずして

僧 契 沖

49 千どりすら友よびかはし遊ぶなりなどてや人

64 なきなど人にはいひてありぬべし心とは

79 雨つゆにうたるればこそみち葉のにしきを

のひとりたのしむ

ばいかゞ答へむ

読人 不知

かざる秋はありけれ

沢庵 和尚

50 あつめては国の光りとなりやせむ我がまど照

65 勅なればいともししうぐひすのやどはと

80 憂きことのなほこのうへに積れかしかりあ

らす夜半のほたるは

問はゞいかゞ答へむ

紀貫之 女

る身のこゝろ試さむ

熊沢 了介

51 なほざりにかきなすさめそ鳥の跡は人のこゝ

66 海ならざたゝへる水のそこまでもきよきこゝ

81 つゆしにもみちぬ松もあるものを人のこゝ

ろも見ゆといふなり

ろは月ぞてらさむ

菅贈太政大臣

ろのうつりやすさよ

伊藤 維禎

52 葎生ふる宿にすみつゝ四方の海のそとしるも

67 手まくらのすきまの風もさむかりきみはなら

82 人しらぬこゝろに恥ぢよはちてこそつひには

のは文にざりける

しはの物にぞ有ける

読人 不知

ちなき身とはなるらめ

室 直 清

53 ふみのみをよみてまことの道しらぬ人は紙魚

68 最上川ひとをくだせばいなぶねのかへりてし

83 ひだたくみほめてつくれる真木ばしら立てし

てふむしのたぐひぞ

づむ物とこそきけ

寂然 法師

こゝろはうごかざりけり

賀茂 真淵

54 ほことりてまもれものゝふ九重の御はしのさ

69 わりなしや人こそ人といはざらめ自らみをや

84 しきしまの大和ごゝろを人とは朝日ににほ

くら風そよぐなり

おもひすつべき

紫 式 部

ふ山ざくらばな

本居 宣長

55 ますら男は名をし立つべし後の世に聞きつぐ

70 武士の矢ばせのふねははやくともいそがばま

85 なせば成りなさねば成らずなるわざを成らず

人もかたりつぐがね

はれ瀬田の長橋

源 俊 頼

とすつる人のはかなき

平田 篤胤

56 帰らじとかねておもへばあづさゆみなさかず

71 皆人のいのるこゝろもことわりにそむかぬみ

86 竹のねのしたはひわたるふしのまもけふの日

にいる名をぞとゞむる

ちを神やうくらむ

藤原 為守

かげをあだに暮すな

橘 千 蔭

57 我君のいのちにかはる玉の緒をなにとひけ

72 たれもみなこゝろをみがけ人をする君がかが

87 石をのみたまといだきてなげくかな玉はたま

むものゝふのみち

みのくもりなき世に

権大納言資明

ともあらはるる世に

香川 景樹

58 剣太刀名をとゞめずば草木にもひとしかるべ

73 こゝろだに我が思ふにはかなはぬを人をうら

88 言の葉のおほかるよりやおのづからまことす

きますら男のとも

みむことわりぞなき

従二位為子

くなき罪もうくらむ

小沢 蘆菴

59 ますらをやをりにふれてはたけり猪の猛き心

74 山水のそのみなもとを清めてぞちゝのながれ

89 ほどぐにふしながりせば呉竹の直きをたの

富士谷成章

むかひやなからむ 伴 蒿 蹊

90 見せばやなこゝろの隈も月かげもすみだがは
らの科の夕ばえ 藤 田 彪

91 花もみぢあだくらべして立てる世にてらはぬ
松ぞのとけかりける 千種 有功

92 みがきえて国のたからとなるものは人のここ
ろの玉にぞありける 僧 月 照

93 いかんせむ学びのみの駒くらべきそふもい
やし後るゝもうし 度會 弘訓

94 さかりをば見る人おほし散るはなの跡をとふ
こそなさけなりけれ 読 人 不 知

95 あすか川あすといひてはながしやる月日にか
かるしがらみぞなき 橘 守 部

96 なにひとつ世の為めはせて真写しに残す
たのはづかしきかな 子爵大久保一翁

97 たくみにもをしへ馴してつかふかな鶴飼ひの
てなはずちもみだれず 侯爵伊達宗城

98 天地にはぢぬこゝろはもたずともいつはりな
らで世をばつくさむ 伯爵勝安房

99 世にたぐひなみのうへにも宮ばしらたてゝた
ふとき神のみやしろ 英 人 王 堂

100 すめがみのくだしたまへる大和魂磨けやみが
けひかりでるまで フルベッキ

〔解説〕「教訓百人一首」一冊、後藤和子撰、
明治三十九年六月六日、台湾日日新報社刊。袖
珍小本、本文百頁、各頁一人一首をのせる。は
じめに「教訓百人一首選述のゆゑよし」

そのかみもの教によそへて、父母師長の示
し給へりし古歌ども、そこはかと心に残りつ
るが、今は幼き者育つる吾身の、折にふれて

思ひ出でつるふしぶし繰りかへさるるもいと
尊き心地ぞする。和歌は皇国の美文の粹なる
は言ふも更なり。実に人の心を種とせる言の

葉として、なべて世の教へ草にも引き出でら
れはた加留多遊びの雅びたるわざにも昔より
もてはやさるるは、よしある習慣として覚ゆ
れ。さるにかの小倉百首は、其の歌もとより
秀妙なれど今の世の児童にはなべて耳遠きが
うへに、家庭の読み物として撰ばれにきとも
覚えねば、あながちに歌の心を解き論すべき
にもあらずと思ふにつれて、いかで幼童の心
にも通ひ易くて教訓の助けとなり、はた文辞
の養いともなりぬべきを、かの加留多の体
ならひて集めて見ばやと思ひ起して、仄く教
へられたるを始めて、見聞き心ゆきつるを年
頃書きつけたるがまた積もれるを、此の頃
及び出て加除し、なほ、山口透氏の訂正刪
補を請ひて定めたるが、この新百首なり。畏
くも御製をはじめ奉り、代々のやんごとなき
方々すぐれたる人等の、団体人情の尊く正し
く、調べはたなだらかなるを撰り出でつるな
れど、もとより身にあへぬわざにて、足らは
ぬふしぶし多いと多かりぬべし。されどこは
ただ、我と心を同じくせる、やから、友どち
に分たんのすさびにて、さのみやはと、印刷
に附しつるなり。家庭の情操は正しく打和ぎ
たるをたふとび、子女の教訓も、その品性の
涵養もことごとしき規律にのみはよらで、く
つろげる和楽の中より得るが多きは、吾も人
も知れるなれば、かりそめの撰びものも、庭

の教への助けとなれかしとて、物しつ。嗚呼
のわざとな笑ひすて給ひそ

明治三十九年三月 後藤 和子

撰述の経緯については撰者の書いている通り
であろう。撰者については閱歴等一切不明であ
る。この百人一首が台湾で撰定、出版されてい
ることがわかる。台湾が、日清戦争によって帰
属して十年という台湾で、出版されたこととし
ても珍らしい。御製、御歌五、は御生存の天皇
皇后皇族、これを別格として、国体七、君臣一
三、父子一一、夫婦三、兄弟二、朋友八、文四、
民八、あと雑というような分類になっている。

作者は、現存の皇室の方々の外に、後嵯峨、
伏見、龜山、後龜山、光格、孝明の六天皇、宗
良親王、熾仁親王、法親王尊胤があり、時代で
いえば、須佐之男命の「八雲たつ」をはじめ、
万葉では与曾布、稻鷹、文儀、家持、道親王、
前々女六人、中古中世では、千古母、友則、素
性、文貞公、実朝、雅頼、道実母、俊成、兼
輔、道玄、兼盛、定家、為仲、貫之女、寂然、兼
紫式部、俊頼、親長、道灌、寂身など二十人ほ
ど、百首中三分の二ほどは近世及び当代の人々
である。中に、権中納言宗武を採っているのは
めづらしい。田安宗武が世にもてはやされる前
のことである。三条家美以下七人には爵位をつ
けている。終にバシルホール・チェンバレンと
フルベッキを撰んでいるのもめづらしい。

教育百人一首

齋藤由松撰
明治三十七年一月刊

- 1 わが国は天照る神の末なれば日の本ともいふにぞありける 藤原 良経
- 2 天地の開けそめぬる神代よりたえぬ日継の末ぞ久しき 藤原 家平
- 3 もろこしの代々は移れどしきしまや大和島根は久しかりけり 源 通親
- 4 君臣の道も神代にさだまりて今にかはらぬ国はこの国 木村 正辞
- 5 万代も千代も動かぬあし引の山こそ国の姿なりけれ 東久世通禧
- 6 天地の神のかためし御国とてをかしはてたる夷をも見ず 源 基綱
- 7 白波の立ちまさりたる国ぶりは海のかなたにたぐひやはある 千家 尊福
- 8 世治まり民やすかれと祈るこそわが身につきぬ思ひなりけれ 後醍醐天皇
- 9 照りくもり寒きあつきも時として民に心のやすむまもなし 光厳 天皇
- 10 夜を寒みねやの衾のさゆるにもわらやの風を思ひこそやれ 後鳥羽天皇
- 11 いにしへの書見るたびに思ふかなおのが治むる国はいかにと 今上 天皇
- 12 山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心我あやめやも 源 実朝
- 13 もろこしも天の下にぞありと聞く照る日の本を忘れざらん 成尋法師母
- 14 大海の潮干て山となるまでに君はかはらぬ君

- 15 ちはやぶる神こそ知らめ大君の御代よろづ代にましませ 西行 法師
- 16 古の人におくれて生れずは開けゆく世にいかといのる心は 晃 親王
- 17 白波のよるの守りのつまどさへさしもかためで逢はまし 毛利 元徳
- 18 いづくまで歌ふを聞くも君が代を千代といはぬ君が御代かな 熊代 繁里
- 19 千代かけて今日の恵みを仰ぎつつ御法をまもれ四方の民草 三条 実美
- 20 君がため花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな 加納 諸平
- 21 白金もこがねも玉も何せんにまされる宝子にしかめやも 山上 憶良
- 22 世の中に思ひあれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな 紀 貫之
- 23 さまざまのうきにたへても世にふるは子といふものあればなりけり 井上 文雄
- 24 生ひたたまむ年月おもふ子ゆゑには我が身の老もまたれぬるかな 黒田 長知
- 25 久方の月も桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな 菅原道実母
- 26 人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな 藤原 兼輔
- 27 人の子の親になりてぞわが親の思ひはいとど思ひ知らるる 康資王母
- 28 麻繩にかかる身よりも子を思ふ親の心をとくよしもがな 渡辺 華山
- 29 先立たばいかに嘆かむたらちねの子を思ふ道

- 30 おほしたてし親なかりせばいかにして君のめぐみを我はうくべき 平 景隆
- 31 垂乳根のありていさめし言の葉はなきあとにこそ思ひ知らるれ 藤原 為氏
- 32 ながれての世にも名高く聞えけり老を養ふ瀬のひびきは 足代 弘訓
- 33 上つ枝の花のしづくにうるほひてしづ枝のつぼみ香にほふなり 村上 忠順
- 34 春日野のはらからこそは世の中のうき田の森のなげきをも問へ 小沢 芦庵
- 35 あわ雪のけぬべきものを今までにながらへぬるは妹にあはむとて 大伴田村大嬢
- 36 埋火のあたりのどかに兄弟のまとるせし夜ぞこひしかりける 松平 定信
- 37 なく泪雨と降らなんわたり川水まさりなばかへりくるがに 小野 篁
- 38 ありつつも君をば待たむ打ちなびくわが黒髪に霜のおくまでに 磐姫 皇后
- 39 わが背子は物な思ひそ事しあらは火にも水にも我なけなくに 阿部 女郎
- 40 ふるさとに今宵ばかりの命とも知らでや人の我をまつらむ 菊池 武時
- 41 去年の春ちりにし花も咲きにけりあはれ別れのかからましかば 赤染 衛門
- 42 人の友わが友わかず世の中にいれしきものはなさけなりけり 香川 景樹
- 43 まこともて交るときは天の下わが友ならぬ人やなからむ 八田 知紀
- 44 すなほにて一ふしあるを呉竹のよにたのものし

- き友としてまし 三田 葆光
 45 千年へむ君しいまさばすべらぎの天の下こそ
 うしろやすけれ 清原 之輔
 46 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知
 る人ぞしる 紀 友則
 47 白雪のふりし昔の友ならで誰かとはましみ山
 への里 徳川 光圀
 48 一昨日もきのふも今日も見つれども明日さへ
 見まくほしき君かな 橘 文成
 49 今日にはさは立ちわかるとも便りあらばありや
 なしやの情わするな 源 国信
 50 語らはむふしもあらねど行きかふや相思ふど
 ちの心なるらむ 清水 浜臣
 51 魂合へる朋と語ればあしざまに言はるるさへ
 も嬉しかりけり 黒川 真頼
 52 しきしまの大和心を人とはばあさ日に匂ふ山
 ざくら花 本居 宣長
 53 天つ空てる日の本にありながらくもる心のく
 まを持ためや 伏見 天皇
 54 真直なるやまと心に学びては神のまことの道
 は得てまし 本居 大平
 55 影見つつ心つくろふ人あらばいかに鏡もうれ
 しからまし 福羽 美静
 56 日の本のやまと心のます鏡曇らすべしや世は
 うつるとも 本居 豊頼
 57 あし引の山下水の清くのみあらまほしきは心
 なりけり 千家 尊孫
 58 誠とはただいつはらぬことなるを守りがたく
 はなに思ふらむ 坂本 秋卿
 59 天地にはちぬ心はもたずともいつはりならで
- 世をばつくさむ 勝 安房
 60 人知れぬ心に恥ちよ恥ちてこそ遂に恥なき人
 となるらめ 室 直清
 61 わりなしや人こそ人といはざらめみづから身
 をや思ひすつべき 紫式部
 62 とにかくに我身ひとつはなしつべし残らむ名
 こそうしろめたけれ 道命 法師
 63 まめ人のむかし語りを身にしめて聞くやうな
 るの誠なるらむ 飯田 年平
 64 白金も黄金もあれど貪らぬころや人の宝な
 るらむ 八木 雕
 65 かくばかり楽しき御代をうかりきと何をほり
 して人のいふらむ 松浦 詮
 66 末つひに海となるべき山水もしばし木の葉の
 下くぐるなり 伴 蒿 蹊
 67 堪へ難き夏も軒ばのしのぶより心すずしき風
 は吹くなり 渡辺 重春
 68 底ひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあ
 だ波は立て 素性 法師
 69 ほどほどに竹にも節のなからめやすなほなる
 のみ人の道かは 上月 豊蔭
 70 横はしる芦間の蟹もゆきあひてゆづるばかり
 の道は知りけり 伊東 祐命
 71 野べに生ふるいささむら竹いささめ人の為
 よき事はかりせよ 橘 枝直
 72 手折らじな人の垣根の梅の花我にて知りぬ惜
 しきところは 寂身 法師
 73 なつかしきうばらの花の下にだにあやしき針
 のある世なりけり 伴林 光平
 74 ますらは名をし立つべし後の世にききつぐ
- 人も語りつぐがね 大伴 家持
 75 立てそむる志だにたゆまずは竜のあぎとの玉
 もとるべし 大国 隆正
 76 雲井にもものぼる心のなくてやは思ひ立つ身の
 世にひそむべき 鈴木 重胤
 77 斯くてのみあるべきものか斯くてただやむべ
 きものかあはれ世の中 松平 忠敏
 78 人ばかりおとりしもせじ月も日もなにか昔の
 空にかはれる 伊藤 仁斎
 79 雄心しふり起しなば少女だに大きいさをの立
 ざらめやは 河村 重子
 80 倒れてもまたたつこれの翁こそ書よむ人の教
 へなりけれ 横井 時冬
 81 あし引の山をぬくてふ手力も身には思はず心
 にもがな 阿闍梨契沖
 82 知るや人たもつこころの玉だにも磨くにつけ
 て光りありとは 荷田 東瀨
 83 瓦とも身を砕きても心をば疵なき玉となすべ
 かりけり 横山 由清
 84 夜ひかる玉も何せん身をてらす書こそ人の宝
 なりけれ 今上皇后宮
 85 君が代の光そはずはあつめつる螢も雪もかひ
 なからまし 本居 内遠
 86 あだ波のひびきは絶えて藻汐ぐさしげりゆく
 世となりけるかな 黒田 清綱
 87 さばかりは言ひもえがたき真心のおくを見す
 る水茎の跡 加藤 千蔭
 88 筆のあと過ぎにしことをとどめずは知らぬ昔
 にかであはまし 式子内親王
 89 家々にかふ蚕の糸を綱手にて国の富をも引く

べかりけり

安部井磐根

90 得がたきを何かはいはむ世の中につねあるものは宝なりけり 加藤 千浪

91 ただにはやは明かし暮らさむ玉くしげふたたび来べき月日ならぬを 税所 敦子

92 とにかくに年へて後と思ひしに昔も今も同じわが身か 野村 望東

93 君が為民が為とぞ思はずは雪も螢もなにか集めむ 藤原 師兼

94 さきくさの三つの宝につぐものはみ国をまもるやまとだましひ 高崎 正風

95 君のため世のため何かをしからむ捨ててかひあるいのちなりせば 宗良 親王

96 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとどむる 楠 正行

97 千万のいくさなりとも言挙げせずとりて来ぬべきをの子とぞ思ふ 高橋 虫麿

98 劔太刀名をとどめずは草木にぞひとしかるべきますらをの伴 富士谷成章

99 かかるときさこそ命のをしからめかねてなき身とおもひなさずは 太田 道灌

100 ますらをの行くとふ道ぞおほらかに思ひてゆくな益荒雄の伴 聖武 天皇

〔解説〕「教育百首」撰者齋藤由松、明治三十七年一月二十五日、新潟、文港堂刊。本文一〇〇頁、全歌に略註を加える。本居豊顕、木村正辞、はじめに教育勅語をかかげ、「あさゆふの露もところをおきてこそおほしはたてめ日本なでしこ」(豊顕)、「花をとひ月を見る夜も忘れぬは御国をおもふところなりけり」(正辞)

の序歌あり。次に自序あり。小倉百人一首には恋歌四十二首、教訓を意味するもの数首にすぎず、児女の読物、家庭の読物に不適であるとし猥褻であり風俗紊乱ともいふべきであるから、茲に新しく、忠君愛国、父子、兄弟、夫婦の大道をよみ、文武を勧め、品行を戒むる歌を以てこれに替えようとの意味でこれを撰んだと云っている。更に、

かかれば本書に採る所の歌は、その調高くその言巧なるも、道極的感情に影響すること尠きは捨て、教訓として最も人の心に入り易きものを主とせり。故に作者の人物の如きも、敢て重きをおかず。されどあまり品下りたる人物の口より出でたることは、たとへその言よきも信用薄きは、普通の人情なれば、幾許か注意を加へたり。歌の排列は作者の時代、官位等に関せず、専らその内容により、明治二十三年下したまひし聖勅の語を用ひて分類し、国体、君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友、徳器、学業、義勇等の順序を逐へり。故にまた作者の官位は記さず。

とも述べている。

右によって、撰者の撰出に関する態度がわかる。作者の時代では、近世及び当代の作者を多く採る。木村正辞、東久世通禧、千家尊福、岩倉具視、三条実美、加納諸平、井上文雄、黒田長知、渡辺華山、木下長嘯子、足代弘訓、村上忠順、小沢芦庵、松平定信、香川景樹、八田知紀、三田葆光、徳川光圀、清水浜臣、黒川真頼本居大平、本居宣長、福羽美静、本居豊顕、千

家尊孫、坂本秋卿、勝安房、室鳩巢、飯田年平、八木雕、松浦詮、伴蒿蹊、渡辺重春、伊東祐命、橘枝直、伴林光平、大國隆正、鈴木重胤、松平忠敏、伊藤仁斎、河村重子、横井時冬、荷田東満、横山由清、本居内遠、黒田清綱、加藤千陰、安部井磐根、加藤千浪、税所敦子、野村望東尼、高崎正風、富士谷成章等々五十数人をかぞえる。

この百人一首も、小倉百人一首に抵抗を示して撰ばれたものである。小倉百人一首に恋の歌が多いのを、猥褻であるときめつけるところなどに、当時の道学者の姿を見ることが出来る。品行を戒むるために撰んだというのである。明治二十三年十月三十日下された教育勅語の旨に添ったものであるといっている。

勅語の語句を追って、国体、君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友、徳器、学業、義勇の順を逐うというが、「知識を世界に求め」とか、「進んで公益を広め」とか、「博愛衆に及ぼし」と云った、新しい道徳については歌詠が撰ばれていない。歌詠についてもその様なものは、たやすくは見あたらなかったものと思われる。

野べに生ふるいささむら竹いささめも人の為よき事謀りせよ 枝直

槇はしる芦間の蟹もあきあひてゆづるばかりの道は知りけり 祐命

あたりがせいぜいの処である。この底迷期をへてやがて大正期に展開するのである。

後この百人一首が、新潟で出版されたところに地方文化史の上に足跡を残している。